
IS ~ 舞い降りる虚空の使者 ~

KURENAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（舞い降りる虚空の使者）

【Nコード】

N3892Y

【作者名】

KURENAI

【あらすじ】

霊帝“ケイサル・エフェス”との決戦を終え、平行世界の番人として旅立ったクオヴレー・ゴードン。そんな彼が辿りついてのは、女性しか使えない兵器“IS”の存在する世界だった。みなさん本当に申し訳ありません！>（――）<

第一話 プロローグ（前書き）

みなさんお久しぶりです！

みなさんもうお忘れになってると思います！KURENAIです！

このたびは皆さまに大変ご迷惑をおかけしました！本当に申し訳ありません！> (_ _) <

いいわけになりますが、アカウント消したのには少しわけがありまして…。

そのことについては活動報告書に書いておきますので、気になるようでしたら見てください だれも興味ない！

第一話 プロローグ

何もない虚空のような空間の中、そこでぶつかり合う二つの機体があつた。

一つは黒を基調とし、黄色い翼をはためかす、まるで悪魔を思い出させる機体“デイス・アストラナガン”。そしてもう一つは赤を基調とし、黒い翼を広げる、墮天使を思わせる謎の機体。

「お前は何者だ！」

デイス・アストラナガンの操縦者“クオヴレー・ゴードン”が叫ぶ。だが、答えは沈黙。

(一体、ここは…)

霊帝“ケイサル・エフェス”との決戦を終え、全ての並行世界を守るために旅だつたクオヴレー。自身の使命を果たすため幾度となく戦闘も行ってきた。

異例なのはこの空間である。並行世界から別の並行世界へ転移しようつとした時、この虚空のような何もない空間にたどり着いた。そして現れたのは見た事のない赤い機体。そしてその機体は突然クオヴレーとデイス・アストラナガンに襲いかかってきたのだ。

（この機体は何だ…？）

今限られた状況で現状を把握しようとするクオヴレー。そのクオヴレーの思考に反し、その機体は背中から大剣を引き抜くところらに向かってきた。

それに合わせ、クオヴレーはデイス・アストラナガン唯一の近接武装である大鎌“Z・Oサイズ”を構える。そして翼に緑の粒子をばためかせ、赤い機体に突撃した。

赤い機体はデイス・アストラナガンの動きに合わせて、大剣を振る。クオヴレーはそれを回避し、Z・Oサイズを振り下ろした。

「切り裂け！」

赤い機体はそれを回避、だがクオヴレーはZ・Oサイズをツイン・ラムライフルに換装させ、その引き金を引いた。

「そして、撃ち砕け！」

その瞬間に赤い機体は片手を突きだす。そこから黄色いバリアが出現。直撃を防いだ。

（このままでは、埒があかないか…）

クオヴレーがそう考えている時、赤い機体は腹部の装甲を開放した。

（これは、危険だ…）

今までの経験と、デイス・レヴの反応がクオヴレーにそう告げる。

そしてその開放された腹部から大きな砲筒が姿を現した。

「デイス・レヴよ、その力を解放しろ」

クオヴレーの言葉と共に、デイス・アストラナガンの胸部装甲が開放され、そこに黒紫色のエネルギーが圧縮される。対する赤い機体の腹部の砲筒にも、赤いエネルギーが圧縮されていた。

「テトラクテュス・グラマトン…」

圧縮された黒紫色のエネルギーが大きくなり、迸る青白いプラズマに包まれながら不気味に輝きだした。

「虚無に帰れ！ アイン・ソフ・オウル！ デッド・エンド・シュート！」

そして辺りに黒と青の稲妻が発生、圧縮されたエネルギーが放たれる。

そして赤い機体も、大きな砲筒から圧縮された赤いエネルギー砲を発射させた。

赤と紫、二つのエネルギーがぶつかった瞬間、空間が歪み始め、渦を巻く。

（まずい…！）

ぶつかり合った二つのエネルギーが干渉し合い、そこに赤と紫の混じった大きなワームホールが発生した。

「がああああ！」

そして発生したワームホールは二つの機体を吸い込み、この空間から消滅した。

第二話 舞い降りる虚空の使者（前書き）

もう少ししたら忙しくなるので、投稿が遅くなる可能性があります
！申し訳ありません！

とりあえず2話です！

第二話 舞い降りる虚空の使者

空中に出現するワームホール。そこから吐き出されるように落とされる一つの人影。輝く銀髪の髪にパイロットスーツの男性　クオヴレー・ゴードンだ。

（ここはどこだ？）

地に降り立ったクオヴレーは辺りを見渡しそう思う。今立っている場所はグラウンドの上、見えるのは観客席。そこからここが競技場のような場所だということは判断出来た。

（一体俺は…）

そこで先ほどまでのことを振り返るクオヴレー。そこで一番重要なことに気がつく。

（アストラナガンがない）

先ほどまで搭乗していた機体　　デイス・アストラナガンが消えていたのだ。基本冷静な彼も、さすがにこの時は動揺を見せ始める。

そんなクオヴレーの頭の中に直接ノイズが流れてきた。そしてまるで体の中を何か伝達してきているかのような感覚に見合われる。

（なんだこれは…、右腕からか…？）

そして右腕を見る。そこには黒い蝙蝠を思わせる装飾の入ったブレスレットが付けられていた。

(これはアストラナガン!?…だが何故ブレスレットに!?)

クオヴレーはそのブレスレットを見てそう確信する。クオヴレーだからこそ感じることでできる直感だった。そして何故ブレスレットになったのかを分析する。

そんな最中、クオヴレーは人の気配を感じ取った。

(隠れられる場所はないな…)

クオヴレーは万が一に備え、いつでも銃を抜けるように構えて神経を集中させる。ここが軍関係の場所ならいきなり撃たれても仕方がないのだ。

「お前は誰だ？」

現れたのは黒いスーツを纏った黒い髪の女性。対峙しただけで相手のレベルを理解できるだけの経験は積んでいる。その女性ただものではないということはすぐに理解できた。

(やはりここは軍関係の場所か…)

クオヴレーはそう分析するのと同時に、これからどうするのかを考える。だがそんな時、黒い髪の女性は顔色を変える。まるで何かに驚愕するかのよう…。。

(?…どうかしたのか?)

クオヴレーはその女性の視線の先を目で追う。そこにあるのはブレスレットと姿を変えたデイス・アストラナガンだ。

「お前には色々話を聞く必要があるな…」

そう呟き顔を元に戻す。

「ついてこい」

その女性はそれだけを告げ、踵を返す。だがクオヴレーへの警戒は全く怠らない。

(話を聞く…ということは何かあると言うことか…)

このこともよく分からないクオヴレーは、話を聞きたい機会だと思った。むこうがこちらに話がある以上いきなり撃たれたりはしないだろう。

そしてクオヴレーはその女性を見つめる。

(それにしてもなぜあの女はアストラナガンを見て驚いていた？アストラナガンがブレスレットになったのと何か関係があるのか…?)

考えたが答えは出ない。情報が足りなさすぎる。

(ついて行けば分かるか)

クオヴレーはそう思いその女性について行った。

たどり着いたのはどこかの一室。その女性が扉を閉め、クオヴレーに尋ねた。

「色々聞きたいことはあるが…まず名前から聞いておこう。名前は？」

「……クオヴレー・ゴードンです。……あなたは？」

「私は織斑千冬。IS学園の教師をしている」

（なるほど…ここは学園か）

「早速だが本題に入らせてもらおう。そのISについてと、どうやってここに侵入したか教えてもらおう」

（IS？）

聞いたことのない単語にクオヴレーは戸惑った。

「…ISとはなんですか？」

「お前！？ ISを知らないのか！？」

千冬が驚く。その反応によって、クオヴレーはここでは皆が知っている常識的なものと判断した。

そこから考えられる可能性、それはここが並行世界だということだ。ここが自分の知らない星であるという可能性もあるが、その確率は非常に低い。そのためクオヴレーはそう解釈した。

(話すべきか…)

話さなければ話しは進まないだろう。だが千冬に下手なウソは通じない。だからと言ってありのままを話すわけにはいかない。

冷静に言葉を選び、クオヴレーは言った。

「一つだけ言いたいことがあります」

「何だ？」

「…おそらくここは俺の居た世界とは別の世界です」

「どづいつことだ？」

「俺は突然出現したワームホールに吸い込まれて、気がつけばここに居ました。そしてあなたの口ぶりからしてここではISというのが常識となっています。ですが、俺はISという言葉を一度も聞いたことがありません。おそらくそのワームホールでこの世界に飛ばされたものだと思われます」

千冬は考えた。それならここに侵入した方法、クオヴレーがISについて知らないことについても説明がつく。

雰囲気からクオヴレーがウソを言っていないことも理解できる。だが肝心なところを隠している。それも重大なことを。

「…そのブレスレットは？」

「気がついたら右腕に」

「最後に一つ、お前が隠していることは何だ？」

（見抜かれていた！？）

悟られぬように話したつもりだったクオヴレー。千冬の洞察力に思わず脱帽した。だが、見抜かれたとしても話すわけにはいかない。クオヴレーは千冬の問いに答えた。

「言えません…」

（どうやら本当に言えないようだな…）

千冬はそう判断した。

「いいだろう。お前の言っていることを信じよう。」

それからそう言う千冬。クオヴレーは驚いた。隠していることに答えなかったのに信じると言ったんだ、普通そうなるだろう。理屈で測ることのできない人たちをクオヴレーは知っている。彼女も同種の人間なのだろうか？俺の仲間たちと…。

「どづいことですか？」

「何がだ？」

「俺はあなたの質問に答えられなかった。それにも関わらず信じて？」

「なに、そう深く考えるな。私だって人を見る目はある。お前がウソを言っていないことぐらいわかるさ。それにお前が隠していることが本当に言えないことだということもな」

「……ありがとうございます」

そう言っただけクオヴレーは頭を下げた。

その後クオヴレーはISについての説明とこれからの自分の処遇について聞かされた。

(IS学園か…)

保護という名目でクオヴレーはIS学園に入学することになった。おそらく監視という意味合いもあるだろうが…。

「アストラナガン…一体俺は…」

クオヴレーはブレスレットを見つめ、そう呟く。

俺は何故ここに来たのか？これもアストラナガンの導きなのか？そ

してあの赤い機体は……。それからベッドに横たわり、分厚い参考書を開く。

（今は自分の出来ることをするしかない…か）

それからそのページを一枚一枚捲っていった。

第二話 舞い降りる虚空の使者（後書き）

誤字脱字などがありましたら、よろしくお願ひします！

第三話 IS学園（前書き）

第三話目です！

出来るだけ早く前の状態に追いつこうと思います！

では

第三話 IS学園

「一年一組、ここか…」

クオヴレーは扉の前で教室を確認する。まだ始まってもないが、こういう経験をしたことのないクオヴレーに取っては一つ一つのこと
が新鮮だった。

(それにしても…落ち着かない…)

先ほどから視線が気になってしょうがなかった。まあそれは仕方が
ないことだろう。ISは女性にしか扱えない。IS学園はそのIS
の専門学校だ。ここに男性が、しかも制服姿でいれば、皆視線を注
目させるだろう。

千冬に一人だけ例外がいることは聞いていた。織斑一夏、織斑千冬
の弟である。彼がISを操縦したことは大体的なニュースになって
いるらしい。それに対し、クオヴレーのことはまだ誰にも知らされ
ていないのだ。

それにも関わらず、誰も自分には話しかけてこない。自分のことを
尋ねてこない。聞こえるのは妙な奇声だけ。それにクオヴレーは違
和感があった(実際の所、彼が近寄りがたい雰囲気を出しているの
だが、本人にその自覚はない)。

そして扉を開けるクオヴレー。教室の中の生徒たちの視線が一点に
注目した。

それから流れる沈黙。ほんの数秒だろうが、ジッと見つめられたク

オヴレーにとってはもっと長く感じた。そして…

きゃ…きゃあああぁー！！！！

女性たちから黄色い歓声が上がった。

「ウソ！ 誰あの子！」

「他にも男性のIS操縦者が！？」

「銀髪でクール系！ かつこいい！」

「神さま！ 生まれて初めてあなたに感謝します！」

（またか…）

ここまで来る途中に散々聞いた妙な奇声。クオヴレーは気にせず、自分の席に向かう。だが、その途中で声をかけられた。

「あつと、ちょっと待てくれ」

この“世界の住人”で唯一人、男でISを使える少年。

「いやあ、よかった！ 男子がいてくれて！ 俺は織斑一夏！ よろしく！」

「クオヴレー・ゴードンだ。よろしく頼む」

クオヴレーは微小を浮かべそう答えた。

（俺、織斑一夏は世界でただ一人、男でISが扱える。それで俺は自分以外女しかいないIS学園に通うことになったんだが…）

一夏の席は最前列のしかもまん中。ほぼ全員の生徒の視線を集めていた。

（きつい…きつすぎる！これは何かの罰か神様！）

最初から覚悟していたことだが、その視線は想像以上のものだった。

それから視線を最前列の左端に向ける。そこには黒い髪を後ろで結ったポニーテールの女性がいた。

だがその女性は目が会うとすぐにそっぽを向く。

（なんなんだよ…、一体…）

そんな時、教室の扉が開かれる。入ってきたのは銀髪的美青年。どこか近寄りがたい雰囲気醸し出す“少年”だった。

（！？俺以外に男のIS操縦者！？）

一夏は驚く。それは周りも同じだろう。まるで時が止まったかのよう。皆その一点を見つめ静止していた。

それから…

きゃ…きゃあああぁー!!!

黄色い歓声が起こった。

(すげー美形。あの銀髪って、外国人か?)

その少年が歩き出し自分の目の前を通ろうとする。一夏はその少年を呼びとめた。自分以外のイレギュラーな存在に驚いたが、それ以上男子の生徒がいることが嬉しかった。

「あつと、ちょっと待ってくれ」

その少年は動きを止めこちらを振り向く。

「いやあ、よかった！ 男子がいてくれて！ 俺は織斑一夏！ よろしく！」

「クオヴレー・ゴードンだ。よろしく頼む」

(今笑ったか?)

とりあえず思ったよりも気さくそつで「一夏は安心した。」

(織斑一夏か…)

クオヴレーは一番後ろの右端の席に座り、最前列の真ん中の席を見つめる。はじめてこの学園で声をかけてくれた少年。なんとなくだが、昔の仲間の一人に似ていると感じた。

そんな時、ドアが開かれ、眼鏡をかけた緑色の短い髪の女性が入ってくる。

「皆さん入学おめでとございます。副担任の山田真耶です」

(副担任か…)

どこか抜けている感じがするが、それでもIS学園の教師。実力は高いだろう。そうクオヴレーが分析している中、自己紹介が始まった。

(自己紹介か…、なにかインパクトがあることを言った方がいいのだろうか…?)

ナンバーズに居た影響を受け、そんなことを考えるクオヴレー。そして気がつけば一夏の番までできていた。

「織斑くん！ 織斑くん！」

「は、はい！」

勢いよく一夏が立ちあがる。少し動揺していたことから、一夏も考え事をしていたんだろうとクオヴレーは理解した。

「俺の名前は織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言つて一夏は席に着こうとする。だが、それを遮るものがあった。それは周りから一夏に集中する期待の眼差し。まるでもつと何か聞きたいと訴えかけているようなそんな状況。

(冷や汗、どうかしたのか?)

この時、クオヴレーは一夏の苦悩など知る余地もなかった。

そして一夏は…

「…以上です」

そう言った。

周りの女子がずっとこけていたが、クオヴレーは何故か分からなかった。

(次は俺の番か…)

「ではクオヴレー・ゴードン君」

「はい」

呼びかけられ、返事をする。それから立ち上がり自己紹介を始めた。

「クオヴレー・ゴードンだ。ゴードンは言われ慣れてないから俺を呼ぶ時はクオヴレーでいい。以上だ」

そう言つてクオヴレーは席についた。女子から何もなかったのはキヤラ的な問題だろう。

そして休み時間。自分の席で座っているクオヴレーに一夏が近づいてきた。

「よう、クオヴレー」

「織斑一夏か」

クオヴレーは一夏を見上げた。

「一夏でいいぜ。男なんて俺たちしかいないんだから、そっちの方が親しみが湧くだろ？」

「そうか…一夏」

クオヴレーが微笑んで言う。それを見ていた女子が何か騒いでいるようだ。クオヴレーと一夏は全く気にしなかった。

「それにしても本当によかったよ。お前がいてくれて。じゃないと俺、孤独な学園生活を送っていたかもしれないからさ」

「孤独…か」

意味ありげにそう言うクオヴレー。かつての自分なら、別に孤独でも構わないと答えただろう。クオヴレーはそう思った。

「だがお前はここの一番前の席の女子…確か篠ノ乃筭だったか…、あの女と知り合いなんだろう？」

「な！？ 何で知ってた！？」

「見れば分かる。お前はちよくちよくあの席に視線を向けていた。だが篠ノ乃は目が合った際に目を背けていた。そしてお前が視線を戻すと篠ノ乃もお前に視線を戻していた。そこからお前らが知り合ということとは分かった」

「…よく見てんな」

「一番後ろの席だからな」

「でもそれなら分かるだろう？ あいつは何故か俺のことを嫌ってんだよ」

「あれは素直になれていないだけだ。俺の知り合いにも、そんな不器用な奴がいた」

悟ったように言うクオヴレーだが、彼に限って筭が一夏に好意を寄せていることに気づいたわけではない。好意からではなく友情の一種だと思っていた。

「そうか？」

一夏がそう言った瞬間チャイムが鳴る。

そしてその次の休み時間。一夏と篤が話しあっているのが目に入った。

それから時間は流れ、クオヴレーは自室に戻ってきていた。

(二人用だが…一人部屋か)

いくら保護といっても、素性の分からない自分を誰かと相部屋にしたりはしない。千冬は信じると言ったが、一般的に言えば信じる人間の方が少ない。信用されるほどの時間もたっていないし、信頼されるようなことをしたわけでもない。妥当な判断だと理解し、シャワールームに向かう。

(学生か…)

クオヴレーにとっての初めての学園生活。全てが新鮮なものだったと言える。授業という名のカリキュラム。基本的な時間の流れ。一つ一つが心を満たしていく、そういう感情が沸き起こる。

(俺の新しい仲間たち…。アストラナガン…俺がまだここで笑っているというのなら…)

そしてクオヴレーは着替えて床に就いた。

翌日

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒回の会議や委員会の出席など、まあクラス長と考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

一時間目、教壇に立つ千冬がそう言う。すると一人の女生徒が手をあげた。

「はい織斑君を推薦します」

「な!？」

いきなりの言動に驚き、声をあげる一夏。それに抗議しようとした時、別の生徒が手をあげる。

「私はクオヴレー君が良いと思います」

(俺か…)

クオヴレーは特に反応は見せなかったが、別に代表になんて興味が

ない。それに自分に人の上に立つ才能があるとも思えない。クオヴレーは静かに言った。

「俺は断る。一夏でいいだろう」

「クオヴレー！」

一夏が絶叫する。そんな時、クオヴレーの斜め前の席、長い金髪にカチューシャをつけた女性が立ちあがった。

「納得いきませんわ！ そのような選出は認められません！」

（セシリア…オルコットだったか…）

「男がクラス代表だなんて言い恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一夏はセシリアを軽く睨む。クオヴレーもセシリアの言い分には頭に来ていた。彼女は一夏のことを見下しているのだ。

「だいたい！ クラス代表者は一番強い人になるべきですわ！ イギリスの代表候補生であるこの私こそ一番ふさわしいに決まっています！」

「…傲慢だな」

斜め後ろを振り向くセシリア。そこにはクオヴレーがいた。

「傲慢ですって！」

「お前は自分の実力を過信し過ぎている。そう言う奴ほど戦闘では早く死ぬ。それにお前に代表が務まるとは思えない」

女尊男卑、ISが女性にしか使えないためそうなってしまった社会。だからといって男を見下すような奴にリーダーが務まるはずがない。そうクオヴレーは思った。

(少なくとも俺の知っている人たちは、年齢や性別、国籍や生まれ
た星などで差別はしない…)

クオヴレーはセシリアを睨む。

「お前がなるぐらいなら俺がなった方が良い」

クオヴレーが許せなかったのは彼女が一夏を侮辱したこと。クオヴレーにとって友達、仲間、その絆は何より大切だった。バルマーのクローン人間部隊“ゴラー・ゴレム”のバルシエムとして生まれたクオヴレー。そんな彼を、敵だと分かっても受け入れてくれた人たち。他のものが最初からなかった彼にとって、絆は何よりもかけがえのないものなのだ。

「いいですわ！　そこまで言うのなら、一対一で決着をつけましょ
う」

「…分かった良いだろう」

周りがざわめき出す。いきなりの決闘、しかもイギリスの代表候補生と男性のIS使いの戦い。皆楽しみなのだ。

「千冬姉、止めなくてもいいのかよ」

「織斑先生だ。…まあいいだろう。好きにやらせておけ」

（それに、ゴードンの実力を測るいい機会だ）

「あとお前もクラス代表候補だ。あの二人の決闘が終わったら勝った方とお前が戦うんだぞ」

「げっ！ ウソだろ！」

「ウソについてどうなる」

千冬はそう答え、ドンと机をたたく。

「いいか！ 勝負は次の月曜、第3アリーナで行う。織斑、オルコット、そしてゴードンはそれぞれ準備をしておくように！」

第三話 IS学園（後書き）

とりあえず、だいたいのプロットは残っていたのですぐに投稿することができました！

自分が消した後の続きの話も書いていますので、早く送りつけるように頑張ります！

誤字、脱字などがありましたら、よろしくお願いします！

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアーズ(前書き)

第四話です！

今日中に第五も載せれるように頑張りたいと思います！

あと、指摘がありました。クオヴレーのISSスーツは一応パイロットスーツという設定です。

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアース

代表決定戦の開催が決まった次の休み時間。千冬は教壇に立ち一度咳ばらいをした。

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

「へ？」

「予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそうだ」

その瞬間、周りの生徒がどよめき出す。一夏は何の事だかさっぱり分かっていなかった。

「専用機？ 一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府から支援が出るってこと？」

「すごいなあ、私も早く専用機ほしいなあ」

（政府からの援助か、予備の機体がないと言っていたが…、データ収集が目的かもしれない…）

クオヴレーは周りの声に耳を立て、そう分析する。そんなクオヴレーにセシリアが近づいて話しかけた。

「一応聞きますが、あなたは専用機を持っていますか？」

「…ああ」

そう答えると、周りの視線が全てクオヴレに向けられる。クオヴレも専用機を持っていたことに驚いたのだろう。

「そうですか。安心しましたわ。わたくしが専用機であなたが訓練機ではフェアではありませんものね」

（やはりオルコットも専用機をもっているか…）

「ま、結果は分かっています、せめてわたくしを楽しませてくださいますように」

そう言ってセシリアは自分の席に戻った。

放課後のアリーナ。ここにクオヴレが一人立っていた。一夏は簿と一緒に特訓しているらしい。クオヴレも一夏と一緒に特訓しないかと誘われたがそれは断った。理由は一つ、このISがデイス・アストラナガンだからである。

デイス・アストラナガン、ISとなったためどうなるかは分からないが、もともとは使い方次第で星すら消滅しかねない機体。授業や参考書だけで完璧に扱えるとは思えなかったのだ。

人が近くに居れば巻き添いを食うかもしれない。最初に出会った時

に千冬からデータを取らせると頼まれたが、周りに人がいる中、正しい方を聞いただけで扱っような無謀なまねはしない。適当な理由を託けて断った。

(まずはISに慣れることだな…)

クオヴレーから見てセシリアは脅威とは感じられない。だが、クオヴレーはただ勝つだけではダメだった。ISのシールド・エネルギー、絶対防御というものを信用できないのだ。アストラナガンなら関係なく殺してしまうかもしれない。絶対防御が作用しても重傷を負わせることになるかもしれない。そう思っていた。

(使える武装は限られるか…)

そして何より攻撃に当たるわけにはいかない。当たればデフレクトフィールドが発動する。あれはこの世界では間違いなく未知のものだ。そして万が一機体が損傷すれば、装甲材質に使われているズフィルード・クリスタルが作用し、自動修復してしまう。そんなことになればアストラナガンを回収されかねない。それは万に一つとしても起こしてはならないのだ。

(ベストは出来るだけ攻撃を当てず、且つ一度も攻撃を当たらないで勝つ…か)

それが理想論だと言うことは分かっている。だが理想論が正論となる部隊にクオヴレーはいた。その部隊で成長したクオヴレーが、理想論だから諦めるなんてことはしない。

それから目を閉じ、神経を集中させた。

次の月曜日

「あれがあの子の専用機か…」

第三アリーナのピット内に映されるモニターを眺めてそう呟くクオヴレー。青を基調としたそのIS。武装からして遠距離型であるだろうとクオヴレーは分析していた。

(誰か来たか…)

人の気配を感じとったクオヴレーは振り返る。そこには一夏と箒がいた。

「ようクオヴレー！　大丈夫そうか？」

「俺は平気だ。お前はどうか？」

「俺か…俺はちょっと不安かも…」

(どうかしたのか…?)

そう思うクオヴレー。一夏がこの一週間剣道しかしていないということとは知らない。どうでもいいが。

『ゴードン君！そろそろスタンバイを！』

その時、真耶の放送がピット内に響いた。

「というワケだ。俺は行ってくる」

「おう！勝ってこいよ！」

一夏の言葉にクオヴレーは微笑で返した。それからクオヴレーは箒の方を向いた。

「篠ノ乃。お前はもつと一夏に素直になった方がいい（友情的な意味）」

「な！？なにを急に言っている！？」

箒が顔を赤くして反論する。一夏はどういう事なのか理解できていなかった。

「お前ら二人を見ていたら、なんとなくだが知り合いを思い出す。俺に最も大切なことを教えてくれた俺の親友」

そう言つてクオヴレーは上を見上げる。

「…とこんな話をしている時間はないな」

それから視線を戻すと、目を閉じて呟いた。

「テトラクテュス…グラマトン…」

クオヴレーの体を白い光が包みこむ。そしてその光が消え、そこに立っているのはIS“デイス・アストラナガン”を発動させたクオヴレーだ。

「これが…ISなのか…」

篤が呟く。ISというには余りにも生物的だったのだ。

「一夏…あとでな」

「おっ」

そしてクオヴレーはピット内から外へ飛び出した。

アリーナに現れたクオヴレー。それを見ていた女子生徒が騒ぎだす。

「見て見て！ アレ！」

「あれがクオヴレー君のIS？」

「なんか悪魔みたい」

そしてクオヴレーはセシリアの前まで飛んで行った。

「それがあなたのISかしら？」

「そうだ」

クオヴレーがそう答える。セシリアは余裕綽々といった感じだった。

「ま、何でもいいですわ。何であろうと勝つのはわたくしなのですから」

「セシリア・オルコット、俺は無駄話をするつもりはない」

クオヴレーの言葉にセシリアは頭にきた。

「いいですわ！ ならとつと終わらせて差し上げます！」

その言葉とともにセシリアは右手に取りつけられたライフルを放つ。

（レーザーか…だが！）

「単調な攻撃だ」

クオヴレーはそれを容易に回避。そしてデイス・アストラナガンの黄色い翼をはためかせ、セシリアに突撃する。

「Z・Oサイズ」

その手には携行式のナイフを握られている。

（接近してくる…ですが！）

「遠距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうだなんて…」

(!?)

そこでセシリアの言葉が止まる。クオヴレーが一気に速度を上げたのだ。そしてその速度はセシリアの想像を遥かに凌駕していた。

「斬り裂け」

懐まで潜り込むクオヴレー。その手に握られていたものが気づけば大鎌に変わっていた。

(大鎌!? しかも速い! …ですがこれぐらいなら!)

大鎌のなぎ払いをセシリアは回避する。

(さすがは代表候補生か…、だがこの距離ならば…!)

「逃しはしない」

(!?) ライフル!?)

クオヴレーの手に握られていた大鎌が、今度はラアム・シヨットガンに姿を変えていた。それに寸前で気づいたセシリアだったが、回避するにはすでに遅い。クオヴレーは引き金を引く。

バンツ!

ラアム・シヨットガンから放たれる弾がセシリアに直撃する。

「すごいですよ織斑先生！ ゴードン君が押してます！」

「そうですね…」

二人の戦いをモニターで見る千冬と真耶。千冬から見ても、クオヴレーの戦いはすごいと、いや凄すぎると言えた。

（レベルが違いすぎる。オルコットに勝ち目はない。ISの性能、操縦者としての才能、そしてくぐってきた修羅場の数、それが違いすぎる）

この戦いの観客の中で、一番クオヴレーとデイス・アストラナガンについて理解しているのは彼女だろう。そしてその危険度も。

（あのISのスペックも異常だが、あの武装も異常だ。そして何より、ゴードン、アイツの動きは何だ？ ゴードンの話では、奴がISを所持してからまだ一週間ちよっとしかたっていないはずだ。そんな人間にあんな動きが出来るわけがない。自分の武装を理解しつくしていなければ…そしてそれ相応の場数を踏んでいなければ出来ない芸当だ）

クオヴレーは自分がパイロットであるということは話していない。そのため千冬はもしかしたらクオヴレーはISについて前から知っているんじゃないかと考えた。

だが、その考えは自ら切り捨てる。IS操縦を見て、その操縦者が

どれくらい経験を積んでいるのかを理解するくらい彼女にはわけはない。クオヴレーのレベルは確かに高いが、IS操縦者としてはまだまだ素人、あの動きが出来るほどの場数をISで積んでいたのなら、と考えれば自ずと答えは出るのである。

(ゴードンは別の“何か”で経験を積んでいる。それが何かは分からないが、その経験があるから奴はこの一週間ちよつとであのレベルまでたどり着くことが出来たんだろう…)

モニターを真っ直ぐ見つめ、千冬はそう思った。

「まさかこのわたくしが先手を喰らうとは…、油断しましたわ」

硝煙から抜けだし、セシリアはクオヴレーから距離を取る。

「ですが！ もうあなたにチャンスはありえませんか！」

セシリアがそう言うと、四機のビット型の兵器が姿を現した。

「わたくしのISの名前ともなった武装、“ブルー・ティアーズ”。これからが本番ですわよ！」

四機のブルーティアーズが一斉にクオヴレーに襲い掛かってきた。

だが…

(遅すぎる…)

クオヴレーは放たれるビームを全て回避。そのまま一気のブルー・ティアーズに近づきZ・Oサイズでなぎ払う。だがそれをビットは回避するが…

バンツ！

ラーム・ショットガンが一機のブルー・ティアーズを撃ち落とした。

「な!？」

顔色を変えるセシリア。やっと顔に焦りが見え始める。扱いには絶対の自信のあるブルー・ティアーズがいきなり破壊されたのだ。クオヴレーの強さを理解するには十分であった。

そして残り三機のブルー・ティアーズがクオヴレーに襲い掛かる。

(わたくしは彼を侮っていました。心してかからないとこちらがやられる！)

やみくもに襲いかかるだけだった先ほどとは違い。狙いを定め三機を連携させて来る。

クオヴレーはそのビームの嵐を回避しながらセシリアに言った。

「…残念だがセシリア・オルコット。お前のブルー・ティアーズの弱点は見切っている。お前のブルー・ティアーズはお前が命令を送らなければ動かない。あの時、俺の鎌は避けられたが、ラーム・ショットガンは避けられなかった。それはお前の伝達速度が間に合わ

なかったからだ。そしてもう一つ、お前はこれを使用している時、制御に集中して自身は動くことができない。つまり格好的となる」

「それがどうしたというのですか！ 今あなたがその場を動けない以上関係のないことですよ！」

実際動くことはできる。だがそうすれば被弾してしまう可能性がある。るので動くわけにはいかないのだ。

(ならば…ビットにはビットだ！)

「行け！ ガン・スレイヴ！」

背中から六機の蝙蝠型のビット兵器、“ガン・スレイヴ”が姿を現す。

(ビット兵器！？)

「残念だがオルコット。俺はこれを操りながら自身も動くことができる」

「な！？」

クオヴレーは連携して放ってくるビームを回避しながら、ガン・スレイヴを操りブルー・ティアーズを撃ち落とそうとする。ガン・スレイヴから放たれる非実弾を回避しようと、セシリアはブルー・ティアーズに命令を出そうとする。だが、三機のガン・スレイヴの狙いはセシリアであり、セシリアはそれを回避するため、ビットの制御を放棄してしまった。

バンツ！

三つの場所から生じる爆発。回避に成功したもののブルー・ティアーズは四機とも撃ち落とされた。

「お前の負けだ。諦める」

ガン・スレイヴを戻し、クオヴレーがそう言う。

「何を！ まだわたくしは負けていません！」

再び手に握るライフルでクオヴレーを狙い撃つ。クオヴレーはそれを回避し、セシリアに接近する。

「かかりましたわね！」

クオヴレーが至近距離は近づいてきたのを見計らいそう言う。残りの2機のブルー・ティアーズからミサイルが放たれる。

だがそのミサイルは切り裂かれる。そしてクオヴレーはセシリアの背後にまわりこみ、Z・Oサイズの鎌を首に添えた。

「後一步だったな」

常人なら命中していただろう。だがクオヴレーは常人ではない。コンマ数秒の状況判断など幾度もしてきたのだ。

誰が見ても一目瞭然な決着。鎌を首に突きつけたその姿は、さながら魂を狩る死神といったところか。

そして…

きゃあああああ！！！！！！

一斉に周りから歓声があふれる。まだセシリアが降参をしたわけではないが、皆勝負が着いたと思ったのだ。

そして…

「……わたくしの…負けですわ…」

セシリアが敗北を宣言した。

「勝ちましたよ！ 織斑先生！」

騒ぐ真耶。千冬は苦い顔をする。

（認めたくないが…天才だあの男は…。ゴードンはISのレベルに自分が着いていけないことを知って、最初から制御して戦闘していた。100の力を30、いや20に…。それですらあれだけの性能が出せるあのISも恐ろしいが、リミッターをかけて戦うのとはわけが違う。出力を抑えるのに集中し、且つオルコットへの集中も全く怠らない。人間の集中力のなせる業か…、聖徳太子じゃあるまいし…。まあ、それは後でいいか…今は…）

「山田先生。少し待っていてください」

そう言って千冬は部屋を出た。

第四話 デイス・アストラナガンVSブルー・ティアース(後書き)

誤字や脱字、矛盾点などがございましたよろしくお願ひします！

これからもよろしくお願ひします！(^ o ^) /

第五話 代表決定戦、終幕（前書き）

少しおそくなりました！本当に申し訳ありません！

文才皆無な文は相変わらずですが、よろしくお願いします！

第五話 代表決定戦、終幕

「うわぁお…、俺、今からアレと戦うのか…?」

モニターで戦いの一部始終を見ていた一夏がそう呟いた。

「戦う当人がそんな気持ちでどうする!」

「でも…、あれはちよつとな…」

一夏が低い声でそう言う。 篝も一夏の気持ちは分かっていた。あの戦いを見て勝ち目があるとは思えないのだ。そのためこれ以上何を言っているのか分からなかった。

と、そんな時…

『織斑君！ 来ました！ 織斑君の専用IS!』

真耶の放送が辺りに響いた。

真耶がちよつどマイクに向かって放送すると、部屋の扉が開かれ、千冬が中に入ってくる。それに気づいた真耶は千冬に尋ねた。

「あ、織斑先生！ どこに行ってらしたんですか!？」

千冬はその問いに何事もなかったかのように答えた。

「少し気になることがありまして」

「気になること？」

「いや、大したことはありません」

大したことではないはずがない。真耶はそれに気づいたが、千冬が言わないということは言えないことであるということ。敢えてその問題をこれ以上言及しなかった。

(不審なものは見当たらなかった…が、油断はできないな…)

そして千冬はモニターに視線を向けた。

「次は一夏か…」

その頃、クオヴレーは戦闘準備をしていた。と、言っても、エネルギーは回復しており、機体チェックも終わっているためすることがないといった状態だ。

「それでも俺は俺の戦いを全うするだけだ」

一夏との戦闘でもセシリアと同じことが言えるのは確かだった。問題は一夏のISの戦闘スタイルが分からないということだ。

警戒はするつもりだが、不意を突かれる攻撃をしてくるかもしれない。先ほどのセシリア戦では、遠距離タイプである彼女のISを見て大体の武装を予想することはできた。もし万が一ビット兵器でこちらの不意を突く攻撃をしても、予想の範疇であるため回避できただろう。

だが、基本ISのことをまだ理解していないクオヴレーにとってこの一夏戦はセシリア戦よりも神経を研ぎ澄ませる戦いになる。ISというのが一体どこまでの戦闘が可能なのか分からないため、ISを見てみなければ攻撃方法の予想をつけることができない。何より政府が援助するぐらいだ、特別な仕様があってもおかしくない。

「それでもやるしかないんだがな」

黒いプレスレットを見つめ、クオヴレーはそう呟いた。

「これが…白式か…」

届けられたIS“白式”を見つめ、一夏がそう呟く。そんな一夏に千冬が言った。

『早くしろ織斑。時間がない』

試合開始までにファーストシフトをすませないといけないことを思い出し、一夏は白式を装着させた。

「一夏！ その、なんて言っているのかは分からないが、やる前から諦めるな！」

箒が一夏に言う。一夏が笑って答えた。

「分かってるよ」

「一夏…」

「俺は間違いなく勝てないし、多分一度も攻撃を当てることもできないで負ける。でも、やる前から諦めるのはナシだ」

(武装は近接武器が一つ、名前が“雪片弐型”てのは置いといて、
どうにかして接近できれば勝負になるか…)

今の武装でどうやって戦闘するのかを分析する一夏。だが、肝心な接近する方法が見当たらない。

と、そんなことを考えている内に白式の最適化が終了した。

「終わったみたいだな…」

それから一夏は出撃の準備をする。

「箒」

「なんだ？」

「行ってくる」

ハツとした筈、今言っている言葉かどうかは分からないが、筈は伝えたいままを一夏に伝えた。

「……勝つてこい」

「……ああ」

それに一夏はそう答え、アリーナの空に飛び立った。

「始まりましたね」

モニターを見ながらそう言う真耶。そこに映るのは黒いISと白いISを纏い対峙する両者。それはまるで悪魔と天使が対峙しているかのようだった。

「織斑先生。この戦いで織斑君の勝率ってどれくらいだと思います?」

「織斑の勝率は0%だ。なにをしようと思てはしない」

「…厳しいですね」

「事実だ。この世界、人間が思うほど0%のことはないんだが、こ

ればかりは0%だ」

真耶も聞く前から大体予想の着いていた答えだ。ISの起動が二回目の一夏で勝てる相手ではない。

おまけにクオヴレーに油断や慢心はない。これでは攻撃を与えられるかどうかも疑問である。

(…だが、あいつは全く引いてはいないようだ…)

一夏自身も力の差は分かっている。だが、それでも全く怯んでいない。それに千冬は素直に感心した。

「行くぞ、一夏」

「こい！ クオヴレー！」

二人は言葉を掛け合い、臨戦態勢に入る。そしてクオヴレーが先手を仕掛けた。

(相手の戦法が分からない以上…うかつに近づくわけにはいかないな)

距離を取り、ラアム・シヨットガンで一夏を狙い撃つ。一夏はそれを回避し、こちらに迫って来た。

(迫って来るということは接近戦タイプか…だが)

「まだISには慣れていないみたいだな」

再びクオヴレーは引き金を引く、それを一夏は避けるが…

バンツ！

「ぐわあ！」

二発目のラーム・ショットガンの弾が一夏に直撃する。一度目の射撃を回避した一夏を二発目で狙い撃ったのだ。

「一度避けたからと言って安心するな。追撃はいくらでもできる」

「んなこと言っただって！」

そしてクオヴレーは再び一夏を狙い撃つ。一夏はその弾を回避するも、クオヴレーの射撃は止まらない、連続で一夏を狙い撃った。

連続で降り注ぐ弾丸を全て回避するのは今の一夏では無理であり、徐々にシールドエネルギーを削られていく。

(クソ！ これじゃ近づくことも出来ねえし、やられるのも時間の問題だ)

一夏にとってもこうなることは分かっていた。だが、このままでは終われない…いや終わるわけにはいかない。

(ここで終わったら…千冬ねえに恥をかかしちまう)

そしてある決心をした。

(こつなりゃ！ 玉碎覚悟だ！)

被弾覚悟で一夏はクオヴレーに突っ込んでくる。残りのシールド・エネルギーはあと僅か。これ以上は無理だと悟った一夏は白式の唯一の装備である近接特化ブレード 雪片式型を握りしめる。

(あれが白式の装備か…)

エネルギーを圧縮して作られたかのような刀身を持つ刀。クオヴレーは一瞬でそれがただの剣ではないことを見極める。

「届けー！」

一夏は雪片式型をクオヴレーに振り下ろす。だが…

「残念だが、それでは俺は捕えられない」

それは空を切る。そしてクオヴレーはラாம்・ショットガンの引き金を引く。

「まだまだ！」

(！？)

一夏はそれを回避し、クオヴレーに切りかかった。

クオヴレーは瞬時に武装をZ・Oサイズに換装、雪片式型を受け止

める。

「お前が言ったことだぜ！ 追撃はいくらでもできるって！」

（一夏…！）

クオヴレーにとって、一夏の行動は想定範囲内ではあったが予想外のものであった。あのラム・ショットガンで勝ったと思いついていたのだ。同時に万が一に備え、Z・Oサイズで受け止める心構えもしていた。もしそうしていなければ、喰らっていた可能性だってある。

（万が一に備えていたよかったな…）

歴戦の勇者たちとの戦闘。その経験がクオヴレーにその選択肢をさせた。それなりの修羅場をくぐってきた者たちならこのぐらいの反応は出来る。一夏を歴戦の勇者と呼ぶには経験が足りなさすぎるが、あらかじめクオヴレーが回避すると読んでいれば十分可能な芸当である。

そしてクオヴレー自身も、IS経験はまだほとんどないが、戦闘経験で言えば歴戦の勇者だ。相手の攻撃を防いで終わりにするハズがない。

「行くぞ。一夏」

クオヴレーがそう言うと、肩から六機のビット兵器、ガン・スレイヴが姿を現す。

「やばい…」

そして、六機のビット兵器が一斉に一夏を狙い撃つ。一夏は縦横無尽に降り注ぐ非実弾を回避しながら、クオヴレーから距離を取ろうとする。クオヴレーがビットを扱いながら自身も自由自在に動けることは先ほどのセシリア戦で証明済み、近距離に居てはZ・Oサイズで迎撃される。だが…

「もらった」

「しまった！」

バンツッ！

クオヴレーのラアム・ショットガンの弾が直撃した。

ブーン！

『試合終了。勝者クオヴレー・ゴードン』

白式のシールドエネルギーがつき、試合終了を告げるコールが鳴った。

「はあ、やっぱり負けたか…。にしてもやっぱり強いなクオヴレー」

「いや、それはこちらのセリフだ。お前があの時回避したのには少し驚いた」

戦闘を終え、ピット内で言葉を掛け合う二人。

そんな時、背後から千冬と真耶がこっちに近づいてきた。

「二人とも、お疲れ様です」

「織斑先生！ 山田先生！」

真耶は一夏のもとに、そして千冬はクオヴレーのもとに向かってきた。

「織斑先生どうかしたんですか？」

クオヴレーが尋ねる。千冬はクオヴレーの耳元でボソッと要件を呟いた。

「話がある。あとで私の所へ来い」

そして千冬も一夏のもとへ向かって行った。

千冬と真耶が一夏のIS“白式”の詳しい説明を終え、一行は解散

と言うことになった。

そしてクオヴレーは千冬の待つ部屋に向かう。

(話しというのはなんだ？ アストラナガンのことか？ いや考え過ぎだな…)

そしてクオヴレーは千冬の部屋の扉をノックした。

「来たか…、入れ！」

「失礼します…」

そしてクオヴレーは扉を開け、中に入った。

「要件は何ですか？」

「色々聞きたいことはあるが…、どうせそれはお前の答えられない部類に入ってるものだろう。だからそれは聞かんが…そのISは渡してもらおう」

(！?)

クオヴレーにとってもっとも避けなければならないこと、それを千冬が口にした。

「何故ですか？」

動揺を隠し、冷静を装ってそう尋ねた。

「お前のISを調べるためだ。そのISのスペックは明らかに異常だからな。それにリミッターもかける必要がある。そうすればお前も出力を気にせず扱うことができる。お前にとっても悪い話じゃないはずだ」

（見抜かれている！？）

ばれないように戦闘していたつもりだった。だが見抜かれている。クオヴレーは再び千冬の洞察力に脱帽した。

そしてクオヴレーは冷静にこの言葉の奥にひそめられた感情を読み取った。

（守るためか…）

データーを取ることによって何が危険なのか理解すること、リミッターをかけて制御のミスを起こさないようにすること。全ては守るためだ。それを分かっているためクオヴレー自身、拒絶することができなかった。

「一体どれくらいで返ってきますか…？」

「それは私には分からん…。が、近いうちには返そう」

「あと、ひとつ。聞いてもいいですか…？」

拒絶はしないが一つだけ気になることがある。クオヴレーはそれを尋ねた。

「何故、一夏との戦いを中止しなかったんですか？」

これはクオヴレーが先ほど考え過ぎだと導いた要因に当たる部分。もしデイス・アストラナガンの危険さが理解されていたのなら、あの戦いを中止するのが普通だ。

「答えは二つ。一つはお前とオルコット戦を見て万が一は起こり得ないということは分かっていたからだ。そしてもう一つ、あの戦いを中止すれば、何故中止にしたのかという問題になる。あのISについては私も絡んでいるが、上の人間が絡んでいるのも事実。分かるだろ？ そういう不審な点は見当たらなかったが、お前のことを知らなければ私じゃ庇いきれんということだ」

クオヴレーは理解した。ハタから見れば凄いISだが、試合を中止してしまえば危険なISということになるのだ。自分のことを知られればここに居られなくなるかもしれない。出鱈目な理由を挙げて試合を中止したところでリスクを増やすだけ。これはクオヴレーにとっては一番ベストな選択だったのである。だが…

「何故だ…」

何故そこまでしてくれる？そこまで考えてくれる？それが分からなかった。千冬がどういう人間なのか。少なくとも初めて出会ったあの時だけで理解できたのは理屈じゃ測れない人間、見た目や雰囲気以上に優しい人間だという事だけだ。ナンバーズで過ごし、人を信じることを知ったクオヴレー。千冬を疑っているわけではない。だが、ここまで自分のためになってくれる理由を知らなくてはならないと思った。

「何故？」

「危険だと分かっているけど何故そこまでしてくれる。俺とお前は会ってまだ一週間と少ししかたっていない。おまけに俺は素性不明な人間だ。そこまでされるいわれはない。やりようによっては俺のISを回収し俺を学園から追い出すということもできるはずだ」

それに千冬は呆れた口調で答えた。

「なんだお前は、そんなに出て行きたいのか？」

「違う！　が、何のためにそこまでしてくれるかを聞いている」

千冬は一回溜息を吐いて言った。

「確かにお前にとってはそんなことをされる謂れのないことかもしれない。だが、どういう形であれ、私はお前の担任だ。お前が出て行きたいのならないが…、お前が…生徒がここに居たいと思っているなら、それを守るのも役目だと思っている」

「役目…」

「つまりだ、お前がここに居たいのかのならば居ればいい。居たくないのならばどこへでも行けばいい。どっちだ？」

こういうことが前にもあった。クオヴレーが敵側の人間であると知られて時、ここに居たいかどうかを問われて時。

「…俺は…ここに居たい…」

「そっか、なら居ればいい」

そう言って千冬はカップに注がれたコーヒーを口にした。

(俺はやはり運がいいのかもれない…、俺の巡り合いは…)

今は込み上げてくる嬉しさを実感したい。そう思った。

「あと、だ。今回は多めに見てやるが次からは敬語を使え」

無意識のうちに普段語を使っていることにクオヴレー気づいた。

「わかりました」

頬笑みながらそう言った。今のクオヴレーにとって、何よりも心を占める感情が表に出たかのような笑みだった。

「なんだゴードン。そういう顔も出来たのか…」

「人をロボットみたいに言わないでください。…それに、先生も見かけによらず優しい方です」

(な!?! 私か優しい?)

そんなことを言われるとは思っていなかった。というより異性からそんなことを言われること自体ない。

「と、とにかく。話しはもう終わりだ」

(何をそんなに動揺している…?)

優しいと言われたことがちょっと嬉しい千冬だった。

第五話 代表決定戦、終幕（後書き）

相変わらず、一夏戦が…

書きなおすも、やっぱり最初がiiiって感じになって結局そのま
まです。最後の蛇足もそのまんま…

ま、それはさておき おいっ！

誤字脱字や、矛盾点があればよろしくお願いします！

次こそは今日日中に投稿する予定です！

第六話 中国からの転校生（前書き）

遅くなって申し分ありません！

プロット保存していると思ったら、なんか半分プロット消えてて…

次の投稿分は問題ないので、速く更新できると思います！

第六話 中国からの転校生

クラス代表決定戦終了の翌日、食堂でクラス代表就任のパーティが開かれた。

“クオヴレー・ゴードン”ではなく“織斑一夏”のである。

「ちょっと待て！ どういうことだ！」

一夏が叫ぶ。それから自分の右隣に座るクオヴレーに視線を向けた。

「俺は代表が務まる様な人間ではない。だから辞退した」

「でも勝ったのお前だろ？」

「強さと統率力は別だ。俺はリーダーには向いていない」

きっぱりとクオヴレーがそう言ったため、一夏の視線がセシリアに向けられる。

「ならセシリアは！？ クオヴレーには負けてけどお」「わたくしも辞退しましたわ」「…はあ！？」

（何で辞退したんだ？ あれだけ男が代表になるの嫌がってたのに…）

一夏は不思議に思った。

「何で辞退したんだよ？」

「それはクオヴ…じゃなくて、わたくしも一夏さんが代表にふさわしいと思ひましてので」

(どこをどう見たらそう思うんだよ!? て、いつか今クオヴレーって言おうとしたよな?)

一夏が疑問に持つ。セシリアが本当に辞退した理由はクオヴレーに頼まれたからだった。

(あれは、ゴードンさん…)

朝、登校中のセシリアの視線にクオヴレーの姿が目に入った。

(誰かを待っているのでしょうか?)

そう思うセシリア。だが同時に、昨日の敗北を思い出し目を背ける。あれだけの啖呵を切って、結果は圧倒的な敗北。おまけに最後は自分で負けを宣言。そのため自分が恥ずかしかつたのだ。

だがそれ以外にも二つの感情が、セシリアの心を占めていた。

それは憧れと恐怖。

圧倒的な敗北の中、こんな風にISを使えるようになりたい、そう思った。だがそれと同時に、その圧倒的な力に恐怖心を抱いた。

セシリアはこのまま通りすぎようと心に決める。だが…

「オルコット」

セシリアはクオヴレーに呼び止められる。自らの中に渦巻く色々な感情により、セシリアは一体どういう風に接すればいいのか分からなくなる。

「ゴードンさん、一体どうかしましたの？」

とりあえず平静を装いセシリアは対処した。

「お前に頼みがある」

「頼み…ですか」

「ああ。俺は代表を辞退する。そうなれば一夏とお前のどちらが代表になるか決めなくてはならない。だからお前も辞退してくれないか？」

「つまり、わたくしよりも一夏さんの方が代表にふさわしいと？」

「それもあるが、俺は一夏に代表になってもらいたい」

「……………」

「アイツはなんというか、リーダーの才能を持っていると俺は思う。それに代表になれば戦闘経験も増える。クラス対抗戦もあるしな。そうすればアイツはもっと強くなる」

「……わかりましたわ」

「！？ 随分とアツサリだな」

「わたくしはあなたに負けた身、それぐらい聞いて差し上げます」

「…あと、もう一つ頼みがある」

「なんですの？」

「一夏を鍛えて欲しい」

「！？ どういうことですか？ あなたは？」

セシリアの疑問は正しい。クオヴレーは自分に勝つたのだ。それなら頼むよりも自分でやった方が良いはずだ。

「正確に言えば手伝ってもらおう形だ。俺よりもお前の方がISについては詳しいからな。俺が教えられるのは戦闘方法だけだ。ISの根本的なことを教えるならお前の方が適任だ。それに…」

「それに？」

「お前には自分の目で一夏を判断して欲しい。女尊男卑がこの世界の社会らしいが、それは所詮言葉だ。俺は自分の目で少しずつ知っていくのも悪くないと思う」

見て知る大切を教えてくれた人たち。時にはそれが情報を上回るといことを知ることができた。

(見て知る…ですか。確かにわたくしは男性が劣り女性が優れていると、決めつけてましたわね)

「…分かりましたわ！ このわたくしが一夏さんを強くして見せます！」

(それにクオヴレーさんのことも決めつけてました…)

「オルコット、ありがとう」

「いえ。あとわたくしのごことはセシリアでいいですわ」

「…わかった、セシリア」

そう言ってクオヴレーは学園に向かった。

(わたくしのこの恐怖心は早計過ぎたかも知れませんが…、クオヴレーさんの優しさは本物ですわね…)

遠ざかるクオヴレーを見つめ、セシリアはそう思った。

そして現在に戻り、セシリアは一夏に自分が鍛えるのだと告げる。
すると…

「必要ない！ 一夏には私が教える！」

一夏の左隣に座る箒がそう宣言した。

「じゃあ、一緒に指導すればいい」

それを聞いたクオヴレーがそう言う。その時何故か箒に睨まれた。

一体なんなんだ？クオヴレーと一夏はわけが分からなかったが、理由の分かったセシリアは箒の耳元で囁いた。

「安心していいですよ箒さん。わたくし、別に一夏さんにはそういった感情は抱いておりませんから」

そう言われてしびしび了承する箒。セシリアにその気がないことは安心できたが、箒自身一夏と二人つきりでやりたかった。

と、そんな言い争いの中、一夏はあることに気がついた。

「ん？ そういやクオヴレーはどうするんだ？」

この中で一番強いのは間違いなくクオヴレーである。一夏自身もクオヴレーに教わるのが一番良いと思った。

「ISについては俺よりもこの二人の方が詳しい。戦闘方法を教えてやることはできるが、ISについて教えてやることはできない。だから俺が担当するのは戦闘面と言うことになる」

その説明に一夏は納得するが…

「クオヴレーってIS使えるようになってどれくらいなんだ？」

『ISについては俺よりも二人の方が詳しい』そう言ったことに違和感を感じたため尋ねる。それに対してクオヴレーは…

「だいたい一週間だ」

改めてクオヴレーの凄さを実感した。

そしてその翌日、クオヴレーは千冬に呼びだされる。クオヴレーも要件は分かっていた。

「もう終わったんですか？」

「ああ」

千冬はそう答える。だが若干浮かない顔だった。

そして脳裏に昨日の記憶が過る。

『すまん山田先生、それでこのISは？』

『えっと、その…』

『？ どうか？』

『分からなかったんです』

『分からない？』

『装甲材質、武装は全て不明。他を調べようとすればシステムがショートしてしまいます』

『……………』

『一体、何なんでしょう…』

「？　どうかしたんですか織斑先生？」

「あ、いやなんでもない」

（異世界の物質か…）

クオヴレーが異世界から来た事、千冬はそれを思い出していた。

「リミッターはお前の現時点のIS操縦に合わせてかけた。今のところ出力を30%にまで落としている」

そしてクオヴレーは千冬から黒いブレスレットを受け取る。

「ありがとうございます」

それから一年一組の教室に戻ったクオヴレー。そこでは今とある話

題で騒がれていた。

それは2組の中国からの転校生のことである。

この時期に転校してきた事も不思議だが、その生徒は転入早々2組の新しいクラス代表になっただけらしい。

その生徒がそれだけの實力を持っているという事、クラス対抗戦で一組と戦う可能性があるという事、注目せざるを得ない。

「クオヴレー君はどう思う？ 二組の転校生？」

一人の生徒がクオヴレーに尋ねた。

「見てみなければ、分からないな」

「だよな。一体どういう奴だろ？ 強いのかな？」

「今のところ専用機を持つてるのって一組と四組だけだから余裕だよ」

クオヴレーの言葉に同調する一夏に一人の生徒がそう言う。ちょうどその時、意もせぬところから声が聞こえてきた。

「その情報古いよ」

教室の生徒が一斉に扉の方へ視線を向ける。そこに立っているのは茶色の髪をツインテールにした小柄な少女。その少女は言葉を続けた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝できないから」

誰だ？皆が首を傾げる。だが、ただ一人、その少女を知っている人物がここにいた。

「鈴？ お前鈴か！？」

（一夏の知り合いか…？）

「そうよ！ 中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音！ 今日には戦線布告に来たってわけ！」

一夏を指差しそう宣言する鈴。それと同時に生徒たちがざわめきだした。

「アレが2組の転校生？」

「中国の代表候補生…」

その空気も気にせず、一夏は鈴に言った。

「鈴、なにかっこつけてるんだ？ すっげえ似合わないぞ？」

「な、なんてこと言うのよ！ あんたは！」

一夏に怒鳴る鈴。この時鈴は背後から近づいてくる黒いスーツの女性の存在に気がつかなかった。

そして…

ゴツン

「いったあ」

後ろの女性が鈴の頭に拳骨を落とす。鈴は怒り、振り返りながら怒鳴った。

「何すんの!」

そして振り向いた矢先、絶句する。そこにいたのは千冬であった。

「もうSHRの時間だぞ」

「ち、千冬さん」

必要以上に畏縮する態度を取る鈴。それを見て、鈴が千冬を苦手としている事をクオヴレーは理解した。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

「すみません…」

鈴はそう言うと、一夏に視線を向けた。

「また後で来るからね! 逃げないでよ一夏!」

フンッと踵を返し、鈴は2組の教室に戻っていった。

「あいつが代表候補生…」

（騒がしくなりそうだな…）

新しい波乱を呼ぶ出会いであった。

第六話 中国からの転校生（後書き）

誤字、脱字、矛盾点がありましたらよろしく願います！

次回こそは今日中に投稿します！三度目の正直です！

次回もよろしく願います！

第七話 クラス対抗戦へ（前書き）

三度目の正直です！投稿できました！（＾Ｏ＾）ノ

文才がないのは相変わらずですが…

では

第七話 クラス対抗戦へ

食堂の一角。今そこにはクオヴレー、一夏、箒、セシリア、そして鈴が座っていた。

「一夏、そろそろ誰なのか説明して欲しいのだが」

箒が鈴と一夏を見回し、不機嫌そうな声でそう言う。他の席に座っている人たちもそれには興味があるらしく聞く耳を立てている。

「ただの幼馴染みだよ」

「ム…」

少し唸って一夏を睨む鈴。クオヴレーは、何故アイツは一夏を睨んでるんだ？と不思議に思った。

そしてそれは一夏も同じで、一夏は鈴に尋ねた。

「どうかしたか？ 鈴？」

「何でもないわよ！」

そう言っただけ鈴は一夏から視線を反す。

そして自分以外に幼馴染がいることに驚いた箒は、呆気にとられた声で呟いた。

「幼馴染み…」

それを聞いた一夏は、思い出したように言った。

「ああ、そうか。ちょうどお前とは入れ違いに転校して来たんだっけな。こいつは篠ノ乃箒、前に話しただろ？ 箒はファースト幼馴染みで、お前はセカンド幼馴染みと言った所だ」

「ファースト…」

何か余韻に浸っているかのように呟く箒。鈴はそんな箒に対抗意識を持った声で言った。

「はじめまして。これからよろしくね」

「ああ」

それから鈴は視線をクオヴレーに向けた。

「こっちの彼は？ ニュースとかになつてないけど、ここの生徒ってことはISが使えるってことでしょ？」

一夏に当てたその質問に、クオヴレー自身が答えた。

「ああ、俺の名前はクオヴレー・ゴードン。呼ぶときはクオヴレーで構わない。よろしく頼む風」

「こっちこそね、あと私のことは鈴でいいわ。」

「そうか、なら鈴と呼ばせてもらおう」

そう言いあっている時、セシリアが二人の会話に割り込んできた。

「わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。あなたは2組のクラス代表らしいですが、言っておきますけど一夏さんを侮ったらタダではすみませんわよ！ 何せこのわたくしとクオヴレーさんがきょ「セシリア、誰も聞いてないぞ」…なんですって！」

クオヴレーに言われ、セシリアは鈴を睨む。鈴はセシリアを無視して一夏と会話していた。

「……だからさ、私がISの操縦みてあげよっか」

「ああ、それは助かる！」

無視され続けたセシリアは怒りを露わにし言った。

「ちょっと聞いていらっしやるの！」

「ごめん。私興味ないから」

鈴がそう言い終えると、箒は机をたたいて身を乗り出す。

「一夏を教えるのは私たちだ！」

「それに2組の代表に教えてもらってはこちらの手の内を晒すようなものだ。そんなことをすればクラス代表戦でこちらが不利になる」

クオヴレーもそれに便乗する。最も二人の根本的な目的は徹底的に違うのだが。

それでも、クオヴレーの言っていることは正論であるため、鈴は口ごもってしまう。

そして授業の予鈴が鳴り響いた。

「と、とりあえず！ そっちの練習が終わった時ぐらいには行くからね！ 時間あけといてよ！」

そう言っつて鈴は帰って行った。

放課後

訓練用に借りた小さなアリーナの上空。そこでぶつかり合う二つの閃光。デイス・アストラナガンを起動させ、Z・Oサイズを握るクオヴレーと、白式を起動させ、雪片式型を握る一夏だ。

「行け！ ガン・スレイヴ！」

クオヴレーは叫び、ガン・スレイヴを出撃させ一夏を迎撃する。

「五感を研ぎ澄ませる一夏。自分という存在を鈍らせるな」

「お前は言っつてることが難しすぎるんだよ！」

と、言いながらも、一夏は六機のガン・スレイヴによりオールレンジ攻撃をきっちり回避していた。

それを下で見ていた篤とセシリアは素直に感心していた。

「一夏…」

「すごいですわね…。一夏さん…」

ついこの間ISを起動させた人間とは思えない。いくら機体のスペックが高くても、それを使いこなすにはそれ相応の技量が必要である。一夏がもう使いこなしているかは別だが、この非実弾の嵐を回避しているのは事実である。

(クオヴレーさんの言っていた意味…、分かった気がしますわ)

セシリアが思い出したのは、クオヴレーの「アイツはもっと強くなる」と言う言葉だ。

はつきり言って、デイス・アストラナガンのビット兵器“ガン・スレイヴ”は、“ブルー・ティアーズ”よりも機動力が遙かに上であり、弾の速さも段違い、なにより命中精度が違いすぎる。率直の感想、ビット兵器を扱う自分でも一分たたずに被弾してしまうだろう。まだ一夏が回避を始めて十数秒程度しかたっていないが、それでも凄いことである。ISを使い始めた時の自分なら数秒で被弾してしまっていた。セシリアは一夏の才能を高く評価した。

と、言っても一夏が素人であることに変わりはない。そのすぐ後に非実弾が直撃、それからなだれ込むように連続で撃ち込まれていっ

た。

「はあはあはあ……」

息を切らし地に降りる一夏。それに対しクオヴレーは息一つ乱した様子はない。

「いいか一夏。直撃を喰らっても絶対に止まるな。的になるだけだ。すぐに態勢を整えろ」

「んなこと言っただって……！ 大体クオヴレー。お前前に戦った時よりも動きが鋭くなってないか？」

「それは私も思った。前から動きにムラがあったわけではないが……クオヴレーがその疑問に答えた。

「ああ、リミッターを掛けたからな」

「……は！？」

三人の声が見事にシンクロする。リミッター、まさかそんなものがついているのか！？そう思った。

「ちょ！ リミッターって！ 制限掛けてアレかよ！？」

「ちょっと待て！　そもそもリミッターを掛けて何故動きが鋭くなる！」

「そうですわ！　おかしいですわ！」

各々が言葉をぶつける。完全に冷静さを失っていた。

それに対し、クオヴレーは冷静さを欠くことなく言葉を返す。

「俺のISは強力すぎるからな、出力を制御しないと自分がついていけない。だから一夏とセシリアとの戦闘の時は出力を制御しながら戦っていた。だが、リミッターを掛ければ制御に集中する必要がなくなる。だから俺の動きが鋭くなっただらう」

理屈は分かるため、一夏たちも理解することはできた。だが納得できるかと言われれば別である。驚いたで済ましていい領域の話ではないのだ。クオヴレーはISの出力を制御しながら自分たちと戦っていたということになるのだ。それも初めて一週間ちょっとで。

(確かに凄イとは思ってたけど…)

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもねえよ」

そう答え、訓練を再開した。

それから暫くし、一夏は箒とセシリアによりISについての専門的な訓練に入った。

そしてクオヴレーはというと…

「鈴…お前は何をしているんだ」

鈴に話しかけていた。

戦闘訓練を終えたクオヴレーは、一夏の訓練をこっそりと覗いている鈴に気がつく。鈴もクオヴレーと目が合い、気づかれたかも思っ
て帰ろうとするが、その途中で追いかけてきたクオヴレーに呼び止められてしまったのだ。

「え、えつと…それは…」

鈴は視線を斜め上に漂わせた。

「…一夏か？」

「え！？ ちょ！？ なんでよ！？」

顔を真っ赤にさせる鈴。クオヴレーは自分が言ったことが凶星だと言っ
ることに気づいた。

「凶星か…、お前も一夏のこと好きなんだな」

「は、はあ！？ 何言つてのよ！？」

「！？ 何故そんなに怒る？」

「あんたがストレートに言いすぎなのよ！」

(なるほど、照れ隠しか…)

クオヴレーは鈴の一種の照れ隠しだと言うことに気がついた。

「そうか。それは悪かった。だが、一夏が好きなことをそんなに照れる必要はないと思う。俺も一夏のことには好きだからな」

そして鈴もやつとクオヴレーの言っていることの本当の意味を理解した。

「はあ、あんたも一夏クラスの鈍感ね」

(！？ 俺が…鈍感？)

たまに言われることがあるが、何故かは未だに分かっていなかった。

「それよりも、お前はいいのか？ 一夏に用があつたんじゃないのか？」

「…今はいいの。だって…」

(二人つきりで話がしたいもん…)

鈴はそう思ったが、それ以上は口に出さず、代わりにクオヴレーに

言った。

「にしても、クオヴレーって強いよね。なんで代表じゃないの？」

「俺よりも一夏の方がふさわしいからな」

「ふさわしい？ 何で？」

鈴は不思議に思った。クラスで一番強い人が代表になるのが普通であるからだ。

「……あいつは人を惹きつけて引っ張れる才能を持っている」

（バカなほどの前向きで、どんな状況でも諦めない。多くの人々をより良く導いたアイツのように……）

「惹きつけて引っ張れるか……。そうかもね……」

それから鈴は視線を天井に向ける。それから感嘆めいた声で思い出したかのように言った。

「……でもあいつは、鈍感で……人の気も知らないで笑ってて……でも何故かそれが憎めない奴で……」

「それにあいつは、自分が無意識のうちに多くの人を救っている。それに気づいてはないがな……」

「分かるわ……その気持ち……」

「ならお前の知る一夏も、俺の知る一夏も、紛う事なき一夏だと言

うことだ」

そしてクオヴレーは踵を返す。

「お前が一夏を理解しているのなら、一夏もお前を理解してるだろう。だから伝えたい事はちゃんと伝えればいい」

(理解してる…か。一部例外があるけどそうかもね)

「ありがとう！ クオヴレー！」

「別に礼を言われることはしてないが…」

「いいのよ！ いいの！ 別に！」

そしてクオヴレーはアリーナに戻って行った。

夜

クオヴレーたちは一夏の部屋で会議を開いていた。と、言っても、相手のISも分からないため、戦法ではなく戦術についてであり、それほど時間もかからないためすぐに終わってしまった。

「それにしても、一夏さんと篠ノ乃さんって同室でしたのね」

セシリアがそう言つと、箒と一夏がそれぞれ言った。

「不本意ながらな」

「全くだぜ」

そう言う一夏を箒が横目で睨む。

その時だ、ドアがバタンツと開けられ、一人の少女が中に入つて来た。

「鈴！ お前何しに来たんだ！」

そこにいたのは鈴だった。そして鈴は笑顔を浮かべ言った。

「いやさー。篠ノ乃さんと部屋変わってあげようと思って！」

「ふざけるな！ 何を言っている！」

箒が本気で怒鳴る。鈴はそれを全く気にもしないように言った。

「篠ノ乃さんも男と同室は嫌でしょう？ それに私も幼馴染だから。ねえ！ 一夏！」

そう言つて鈴は一夏に視線を向ける。一夏は顔を引き攣らせて言った。

「俺に振るなよー」

そんな一夏にクオヴレーとセシリアは小声で尋ねた。

「一体どうしたんだ？ お前は鈴に何か言ったのか？」

「そうですね。あまりにも突然すぎます」

「て、言われてもなあ。特に何も変なことは言ってないけどな」

「お前が気づいてないだけかもしれない」

「うーん。別に他愛のない話しただけだけどな……。……。あ！ そ
ういやアイツ……。俺が箒と同室で住んでるって言うてから、なんか
様子が変になったような……」

淡々と述べる一夏を、セシリアがジト目で睨んだ。

「うん？ どうしたんだセシリア？」

「あなた、その時幼馴染みだからどうかとか言ったんじゃありま
せん？」

「ああ。確かに幼馴染みで助かったって言ったよ。見ず知らずの人
じゃ困るからな。でも、それがどうしたんだ？」

「はあ。あなたって最低ですわね」

「はあ！ 何で俺が！？」

一夏がそう言った瞬間、先ほどまで箒と言い合っていた鈴が一夏に
声を掛けた。

「ところでさ！　一夏！　約束覚えてる？」

「約束？　…ああ、あれか！　鈴の料理が上がったら毎日酢豚を…」

「そうそ」「奢ってくれるってやつか…？」「…はい？」

「だから、俺に毎日飯を御馳走してくれるって約束だろ？　いやー、一人暮らしの身にはありg」「最低！」「…へ！？」

パチンツと鈴の平手打ちが一夏の頬に飛んできた。

「あの…だな…、鈴」

「女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて男の風上にも置けない奴！　犬にかまれて死ね！」

「なんで怒ってるんだよ！　ちゃんと覚えてただろうが」

「約束の意味が違うのよ！　意味が！」

「だから説明してくれよ！　どんな意味があるんだ？」

一夏がそう言うと、鈴は顔を赤くさせ口ごもらせる。鈴の言っていることの意味が分かっている筈とセシリアは一夏を睨みつけており、分かっていないクオヴレーはどういうことかと考えていた。

「もういいわ！　じゃあこうしましょ！　来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも言うことを聞かせられる」

「おおいぜ！俺が勝つたらちゃんと説明してもらっからな」

睨みあう一夏と鈴。それから暫くし、鈴がそっぽを向いて踵を返す。

「そっちこそ覚悟してなさいよ！」

そう言い残し部屋を出て行った。

「一夏…」

「おう、なんだ？」

「馬に蹴られて死ね！」

「ですわね」

「え！？」

それから箒とセシリアは溜息をつく。そんな二人にクオヴレーが尋ねた。

「箒、セシリア。鈴の言っていた『意味が違う』ということの意味が分からないんだが…」

「「はあ」

（！？ 何故だ！？）

クオヴレー再びつく二人の溜息の理由が分からなかった。

そして時は流れ、クラス対抗戦第一試合、織斑一夏vs凰鈴音の戦いが始まることとしていた。

第七話 クラス対抗戦へ（後書き）

誤字脱字、矛盾点などがございましたら、お願いします！

次はおそらく明日になると思います！

これからもよろしくお願いします！

第八話 クラス対抗戦（前書き）

駄文だ…、改めてみると…

今回はぎりぎりセーフでした。申し訳ありません！

次回は明日中に投稿します！

第八話 クラス対抗戦

クラス対抗戦第一試合、織斑一夏VS鳳鈴音。

アリーナにはすでに赤色と黒色を基調としたIS“シエンロン甲龍”を発動させた鈴がおり、観客席は生徒たちで満員になっていた。

そしてアリーナのピット内、そこにはISを発動させ出撃準備をしている一夏と、その周りで見守るクオヴレー、箒、セシリアがいた。

「一回戦から鈴が相手かよ…」

一夏がモニターに映る鈴を見てそう呟く。それからクオヴレーが一夏に言った。

「見た目と装備からしておそらく近距離型だろう。だが、所詮見た目での判断だからな、遠距離攻撃もあるかもしれない。油断はするなよ？」

「分かってるって」

そしてセシリアと箒も一夏に言った。

「特訓の成果を見せる時ですわ！」

「自分を信じる。練習の時と同じようにやれば勝てる」

一夏はそれに頷く。それと同時に放送が流れた。

『それでは両者、既定の位置まで移動してください』

そして一夏はピットの外へ飛んで行った。

既定の位置、アリーナの上空で一夏と鈴は睨みあった。

「今謝るなら、痛めつけるレベルを少し下げてあげるわよ?」

「そんなのいらねえよ全力で来い」

「一応言っておくけど、絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、殺さない程度に痛めつけることだって可能なの」

「分かってる」

そして試合開始のコールが鳴った。

『それでは両者、試合を開始してください』

合図とともに、鈴は背中に担いである大型の青龍刀“双天牙月”を構え、一夏も雪片式型を握りビーム刃を展開させる。

そして白と赤の閃光が空でぶつかり合った。

ガキイイイイン!

雪片式型と双天牙月がぶつかり合い、金属音とともに火花が散る。

「やるじゃない一夏！ でも…！」

鈴はそう言い、武器を持っていないもう一つの手に双天牙月を展開する。

（二つ目…！）

「貰ったわ！」

それを鈴が振る直前に、一夏は雪片式型とぶつかり合う双天牙月を弾き、バランスを崩した鈴に追撃を掛ける。

「うらあああ！」

（やば！ 裏めった！）

展開した双天牙月により、体の重心とつり合いが変化。それにより態勢を立て直す時間が普段よりもかかってしまった。

そして回避できないと悟った鈴は雪片式型を双天牙月で受け止める。だが、これもギリギリの対処であり、一端態勢を立て直すため鈴は距離を取り直した。

「良いペースですわね、一夏さん」

「ああ、そうだな」

今、クオヴレーたちは千冬と真耶が観戦している部屋で共に観戦していた。

「ゴードン。お前は織斑に何を教えた？」

千冬がクオヴレーにそう尋ねた。

「俺が教えたのは、基本的な戦術と相手の隙を作る方法ぐらいです。回避、スピード、状況判断能力、それらは訓練の間に伸びていったことです」

クオヴレーはそう答えた。

「ホント、予想以上にやるわね一夏！」

「こつちも特訓して来たもんでね」

距離を取り、お互い言葉を投げ合う一夏と鈴。一夏は心の中でクオヴレーの言葉を思い出していた。

(武器を展開する時に必ず隙が生じる。クオヴレーの言った通りだ
…)

近距離戦闘において最も大切なことは隙を突く事。一夏は鈴が武器展開するのを見極め、そこを突く事により攻め入る隙を作ったのだ。それを鈴も理解した。

「でも、こっからが本番よ！」

そして鈴のISの肩部の装甲が解放、その中の球体が光り出す。

(やばい…！)

一夏は嫌な予感を感じ、回避行動を始めるが…

「遅い！」

そこから不可視の衝撃砲が発射。それが一夏に直撃した。

(あのタイミングでの攻撃は偶然で引き起こることじゃない。多分だけど、クオヴレーが隙を作る方法とかを一夏に教えたんだ。間違いない。一夏は他にも色々知ってるはず。ならもう…！)

「残念だけど一夏。もう近づけさせないよ！」

そして再び衝撃砲“龍咆”で狙いを定めた。

「衝撃砲か…」

それをモニターで見っていたクオヴレーが呟く。空間の揺れ、音、それだけで理解した。そしてそれを聞いたセシリアが言った。

「と、いうことはわたくしと同じ第3世代ということですね…」

「ああ。だがそれだけじゃない。言うだけの实力はある。鈴は一夏の攻めを見て、一瞬で俺が一夏に隙を作る方法を教えた事を理解した。接近戦に持ち込まずに戦う気だろう」

「それじゃ、一夏に勝ち目は…」

篤が低い声でそう言う。

「…………マズいな…」

(可能性はいくつかあるが…一夏が気づくかどうかだな…)

クオヴレーはジッとモニターを見てそう思った。

その頃、アリーナの空を一夏は縦横無尽で飛び回り、衝撃砲を回避していた。

「クソ！ これじゃ近づけないじゃないか！」

止まれば的になるため、動き回るしかない。だが、このままでは近づけず埒が明かないのも事実。

そして一つの選択肢にたどり着いた。

（瞬間加速で…奇襲を仕掛けるしかない…！）

チャンスは一度。見抜かれていたら一瞬で勝負がつく。虚を突いたとしても、回避されれば、また当たったとしても仕留めきれなければ、もう同じ手は使えない。そうなれば今の状態に戻ってしまう。

（失敗すれば負け…か…）

そして一夏は鈴の周りで旋回を始めた。

「そんなことしたって無駄よ！ 観念なさい！」

「悪いがそれは！ 出来ない相談だ！」

そして一夏は真っ直ぐ鈴に突撃して行く。

（バカね！ 終わりよ！）

そして鈴は一夏に狙いを定めた。

（五感を…研ぎ澄ます！）

そして龍砲から空気を圧縮する音が響く。一夏はその音を聞き、龍砲に全神経を研ぎしませる。そして龍砲が光った瞬間、一夏は左に旋回。衝撃砲を回避する。

（避けられた！？）

（今だ！？）

そして瞬間加速で鈴に突撃する。

「うおおおお！」

だが、まさにその時…

ドゴンッ！

アリーナの上空を覆うシールドが壊され、巨大な爆音が響く。

「何だ！」

「何！？」

二人は同時に言った。

「一夏！」

「一体何が起きたの！？」

「システム遮断！ 何かがアリーナの遮断シールドを貫通して来た

「ようですー！」

慌てるセシリア、箒。モニターに映し出された警告場面を見て真耶が千冬にそう言う。そして千冬はアリーナに放送を流した。

「試合中止！ 織斑！ 凰！ ただちに試合を中止しろ！」

そして千冬が放送を終えると、クオヴレーは千冬に言った。

「織斑先生、俺が行きます。ISの使用許可を出して下さい」

「無理だ。これを見る」

そして千冬はモニターに視線を向けた。

「遮断シールドがレベル4に設定…」

「しかも、扉が全てロックされて…、はっ！ あのISの仕業…」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かう事も出来ない。今現在、政府に応援要請を出すため三年の精鋭がシステムのクラッキングを始めているところだろう。遮断シールドが解除されたらすぐに部隊を出撃させる。今は待つ事しかできない」

千冬のその言葉で箒とセシリアも頷く。だが、クオヴレーだけは違っていた。

「俺が遮断シールドを壊します」

箒、セシリア、真耶の三人はクオヴレーの言葉に驚く。だが、千冬

だけは冷静に言葉を返した。

「出来るのか？」

「可能です」

そして一瞬の間を置き、千冬は答えた。

「頼んだぞ」

その頃、一夏と鈴は突然出現した黒い全身装甲のISと対峙していた。

「一夏！ 私が援護するから突っ込みなさい。武器それしかないんでしよう！？」

「その通りだ…。じゃあそれで行くか！」

そして一夏と鈴は黒いISに突撃して行く。

先制は鈴。一夏の飛び込む隙を作るために龍咆で狙いを定め、放つ。

だが、それを容易に回避し、黒いISは鈴目掛けて突撃して来た。

「な！？」

「クソ！」

一夏が瞬間加速で一気に近づき、雪片式型で斬りかかるが、それを軽やかな身のこなしで回避。黒いISは標的を一夏に変更し、拳で殴り飛ばした。

「一夏！」

そのまま地面に叩きつけられる一夏。そして黒いISは一夏に追撃を掛けようとする。

「させないわよー！」

鈴が黒いISを迎撃し、それを阻止しようとする。だが、それよりも早く黒いISは右腕のビーム兵器で鈴を狙い撃つ。そのため鈴は攻撃を中止し、回避行動に7移した。

そしてその隙に一夏も起き上がり、雪片式型を握り突撃するが、その瞬間左手のビーム兵器が一夏を襲う。

「クソ！」

一夏はそれを回避し、鈴の隣まで移動した。

「どうすんのよー！ このままじゃあいつには勝てないわよー！」

「ああ、マズいな……」

(俺のシールドエネルギーも鈴のシールドエネルギーも後僅か、本当によばい)

そもそも先ほどの戦いで両者ともエネルギーを使いすぎた。攻撃チヤンスも残されていないだろう。

そう分析していると、黒いISは全身のビーム兵器を展開させる。肩、腕、足、顔… e t c、全ての砲撃が一夏と鈴目掛けて放たれる。

「なんだこりゃ!」

「あり得ないっつーの!」

裕に10はあるその砲撃から、縦横無尽にマシンガンのように連射してくるビーム。一夏と鈴の実力でこれだけのビームの嵐を全て回避するのは無理である。

(やば!?)

(当たる)

そしてそのビームが一夏と鈴を蜂の巣にするかのように直撃した。

だが、二人の目の前にフィールドバリアが出現。それが二人をビームから守った。

「エンゲージ」

突如聞こえる声に上を見上げる一夏と鈴。そこには黒い悪魔、デイス・アストラナガンを発動したクオヴレーがいた。

「クオヴレー!」

一夏と鈴が同時に叫ぶ。それにクオヴレーは黒いISへの警戒を解かずには答えた。

「無事か？ 一夏、鈴」

「ああ！」

「あのバリアってクオヴレーの！？」

「そつだ。……あとは俺がやる。お前たちは下がっている」

そしてクオヴレーは一瞬一夏と目を合わせる。そして一夏は一回頷いて言った。

「行くぞ！ 鈴！」

「ちょ！？ 何言ってるのよ！？」

「心配すんな。あいつが負けることはないよ。それよりも俺たちが近くに居たんじゃ足手まといだ」

一夏は鈴の反論にそう答え、鈴を引っ張り後ろに下がった。

それをクオヴレーは一瞥し、それから黒いISを見つめた。

（無人機か…）

デイス・レヴは悪霊や怨霊、死霊などの負の無限力だけでなく、生き物の負の感情も力に出来る。それによりクオヴレーは黒いISに

何の感情もない、つまり誰も乗っていないことを理解したのだ。

「なら手加減はいらないな」

クオヴレーはZ・Oサイズを握り、無人機に突撃。無人機は再び全身のビーム兵器を展開するが…

「遅い！」

クオヴレーはガン・スレイヴを展開。それは縦横無尽に無人機に向かっていく。

無人機はそれを避けながらビーム兵器でクオヴレーを狙い撃つが、それをクオヴレーは軽やかに回避。そして無人機の懐に潜り込む。

「斬り裂け！」

振るわれる大鎌を無人機は回避しようとする。だが、その大鎌を振るうのと同時に、超至近距離による六機のガン・スレイヴのオールレンジ攻撃が無人機を襲う。

無人機に直撃した非実弾の雨。クオヴレーは爆煙に包まれる無人機的位置を正確に把握、そしてZ・Oサイズで斜めに切り裂いた。

「そして撃ち碎け！」

武装をZ・Oサイズからラアム・ショットガンに変更。そして…

バンッ！　バンッ！　バンッ！

至近距離から連続で無人機を撃ち抜く。それと同時に再びガン・スレイヴで迎撃。そして…

ドカンッ！

響き渡る爆発。そこにあつたのは無残に碎け散つた黒い塊だけだつた。

「凄い…」

それを見ていた鈴が息をのみ感嘆とした声で言う。

そして一夏は感じ取っていた。自分たちが今まで、クオヴレーの実力の片鱗しか見ていなかったという事を…。

第八話 クラス対抗戦（後書き）

無人機さん（T-T）

本当にごめんなさい。すごく短いです。

誤字脱字、矛盾点がありましたらお願いします！

次回はやっとな転校生登場です！もうすぐ追いつけそうです！

本当に申し訳ありません！

第九話 貴公子（前書き）

転校生登場です。

あと、自分は原作を持っていないので、やってきるのは一人だけです。

では

第九話 貴公子

突然の無人機による襲撃。そのためクラス対抗戦は中止となり、今クオヴレーは薄暗い研究室に呼び出されていた。

その部屋には千冬と真耶があり、中央には無残に碎け散った無人機が機械に繋がれていた。

真耶はコンピューターでそのISを調べていたが、クオヴレーがやってきたことに気づいて手を止めた。

「このISは無人機で登録されていないコアでした。世界にISのコアは467しかありません。でもこのISにはそのどれでもないコアが使用されています。ですがここまで粉々にされてしまっていますから、調べきれない事も只あります。そこで直接戦闘したゴードン君に話しを聞こうと思いましたが…」

一夏や鈴も直接戦闘を行ったが二人には荷が重い。クオヴレーの方が詳しく説明できると判断したのだ。

それを理解し、クオヴレーは静かに言った。

「聞きたいことは？」

「率直に言えば、このISについて分かったこと、気づいた事を教えてください」

(気づいたことか…)

人為的な部分だろう。クオヴレーはそう思った。いくら粉々だとはいえ、コンピューターで調べても分からない事がクオヴレーに分かるはずがない。真耶の言ったことはただの口実であり、知りたいのは無人機の性能や動作についてである事は容易に気づけた。そしてそこから、再び無人機が襲撃してきた時の対策を考えようとしたのだ。

「……動きは機械的でした。センサーで反応を察知し、的確に攻撃する。それだけではなく、攻撃を仕掛けてくる標的を優先的に狙っていました。基本セオリー通りの反応の中で、誰かが攻撃を仕掛けてきた時は、その定石が崩れています。おそらく被弾を避けるためにそう言うプログラムを作ったのだと」

定石通りに無人機が戦闘していたのなら、一夏と鈴はクオヴレーが到着する前に撃墜されていたかもしれない。

「自分が戦ってみて一番感じたのは、所詮プログラムなので動きに限界があります。そこをつけば代表候補生クラス二人もいれば十分撃退可能です」

もう一つある。それはカウンターと急襲。だが、それにはそれ相応の技術と経験が必要であり、危険が伴う行動であるためクオヴレーは言わなかった。

「そうですか……」

真耶が俯いてそう言う。それから顔を上げ、もう一つの質問をした。

「どつやって…、遮断シールドを破ったんですか？」

レベル4の遮断シールドを破ってクオヴレーは侵入した。そして圧倒的な力で無人機を鎮圧した。

真耶は危険に思ったのだ。そして同時にクオヴレー自身の事を心配していた。

力にはそれ相応の危険が伴うし、いつ政府の耳に入るかも分からない。そうなればクオヴレーはここに居られなくなるかもしれない。

その質問にクオヴレーは冷静に考えて答えた。

「……最大出力で切り裂きました」

言える限界の答えだった。レベル4の遮断シールドがどれほどのものかは分からないが、千冬たちの口ぶりか強力なものだと言う事は理解できた。

もしかしたらこのISの攻撃力では壊すことのできない代物かもしれない。だが、これ以上の説明は出来なかった。それはこの世界とは別の世界の技術の話になるからである。

「!?!? 切り裂いたって!」

(これも異世界の物質だからか…)

驚く真耶と冷静に分析する千冬。それから千冬が言った。

「ゴードンのIS“デイス・アストラナガン”のZ・Oサイズはどんなバリアも切り裂く事が出来ます。零落^{れいらくびやく}白夜と似たような感じですよ」

それはでまかせである。だが、真耶は納得させざるを得なかった。だが、それだけでは真耶の不安を消し去ることはできない。千冬も真耶の気持ちは理解できた。

千冬も真耶と同じ不安を抱いた事があった。実際今も不安が全くないわけではないのだ。

だが、それは他人がとやかく言えることではない。自分で向き合っ
しかない。

それから千冬はクオヴレーに言った。

「ゴードン。もういいぞ。あとこの無人機については今は機密事項だ。決して外部には漏らすなよ」

「分かりました」

そしてクオヴレーは研究室を後にした。

それを確認した千冬は真耶に言った。

「山田先生。ゴードンの事で不安があるのは分かります。ですがゴードンの事は信じてやってください」

「はい。信じてます。…私も教師ですから！」

真耶はそう答えた。千冬は微かに微笑み、それから薄暗い天井を見上げる。

(それにしても、ゴードンの実力があれほどだとは…)

千冬はクオヴレーと無人機の戦闘を思い出す。それには寒気すら感じた。

そしてクオヴレーがすでに自分と同格クラスのIS操縦者であるという事を実感した。

翌日のSHR。

教壇に立つ真耶が生徒たちを見渡して言った。

「今日はなんと！ 転校生を紹介します！」

そして教室のドアが開かれ、金色のブロンドの髪を後ろで結んだ“少年”が中に入ってきた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしくお願いします」

微笑みながらそう言うシャルル。それは貴公子と言っても差支えないほどの笑みだった。

「お、男…?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」
シャルルがそう言つと…

きゃ…きゃああああー!!!

女子たちの黄色い歓声が上がった。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ まもってあげてくなる系の！」

騒ぎ出す女子たち、それを千冬が一掃した。

「騒ぐな！ 静かにしろ！」

そして教室は一気に静まり帰った。

「今日は2組と合同で実習訓練を行う。各人は着替えて第二グラウンドに集合。それから織斑、ゴードン。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。では解散！」

千冬の説明が終わり、クオヴレーと一夏はシャルルとともに更衣室に移動した。

途中で女子生徒たちに追いかけられ、走って逃げたため、クオヴレーと一夏は平気だったがシャルルは息を切らしていた。

「はあはあ…、ごめんねいきなり迷惑かけちゃって」

息を整えてシャルルがそう言った。

「いいって。それより男子が増えてよかったよ。俺たち二人しかいなかったからな。俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

「俺はクオヴレー・ゴードンだ。俺の名前を呼ぶ時もクオヴレーで構わない」

「うん。よろしく。僕の事もシャルルでいいよ」

それからクオヴレーと一夏は服を脱いで着替え始める。シャルルは顔を真っ赤にし、目を隠して後ろを向いた。

「？　どうかしたのかシャルル？」

「早く着替えないと遅れるぞ」

「う、うん。き、着替えるよ。でも、その、あっち向いてて」

(何故動揺しているんだ？　まあいいか…)

「いや、まあ、着替えをジロジロ見る気はないが…」

そして二人は後ろを向く。それから僅から秒で声が聞こえてきた。

「着替えたよ」

振り返る先にはISスーツに着替えているシャルルがいた。

「着替えるのちょうはやいなあ…。なんかコツでもあるのか…？」

(ありえない。明らかに人間の着替えの速度を超越している)

その着替えの早さに二人は驚いた。

第二グラウンドに集まった生徒たち。その生徒たちに、白いジャージを着用した千冬が言った。

「本日より実習を始める。まずは戦闘を実演してもらおう。嵐！ オルコット！ 専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る」

二人は面倒臭そうに前に出て行った。

「それで対戦相手だが…」

千冬がそこまで言うと、空から絶叫が聞こえてきた。

「きゃあああ！」

その声で皆が一斉に空を見上げる。そこにいたのはダークグリーン色のISを装着した真耶。そして真耶は一夏目掛けて真っ直ぐ突っ込んで来た。

「どいてくださーい！」

クオヴレーは真耶がISを制御できていない事を理解した。

そしてISを発動させ、一気に空を掛ける。

周りに旋風が巻き起こり、風を裂いて飛んで行く。

そしてクオヴレーは突撃する真耶を受け止め、それから宙に舞った。

「!?!? あ、あの…!! ゴ、ゴードン君!?!」

「大丈夫ですか？」

クオヴレーは抱きかかえている真耶に向かってそう言う。真耶は顔を赤くした狼狽していた。

「わ、私は大丈夫です…! だから、もう離しても平気です」

そう言われクオヴレーが真耶を離すと、真耶はゆっくりと地面に着陸した。

それを見ていた千冬は、セシリアと鈴にしかめっ面で言った。

「お前たちの相手は山田先生だ。とつとと始めるぞ」

「え？ 二対一で？」

「さすがにそれは……」

セシリアと鈴が意見する。それに千冬は余裕の笑みを浮かべて答えた。

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉にムツとする二人。千冬は真耶を一瞥し、準備が整ったのを確認した。

「では！ 始め！」

そしてそう宣言した。

空で対峙するセシリア、鈴と真耶。一番初めに動いたのはセシリアだ。

「行きますー！」

ブルー・ティアーズを四機展開。真耶に向かってレーザーを放つが、真耶は縦横無尽に旋回、それを回避する。

そして鈴は、空を動き回る真耶に狙いを定め、衝撃砲を放つ。

真耶はそれを左腕のシールドで防いだ。

それを下で見ているクオヴレーは、冷静に戦況を分析していた。

（これがIS学園の教師か…、操縦者としての実力も高いが、それ相応の経験もある。二人の勝ち目は薄いな…）

そもそもあの二人にはチームワークの欠片もない。各自が勝手な判断で適当に攻撃しているだけである。それでは逆にお互いが足を引っ張り合う事になりかねない。

そんな時、千冬は自分の後ろにいるシャルルに言った。

「デュノア。山田先生の使っているISの解説をしてみせる」

「あ、はい！」

クオヴレーは考えるのを止め、シャルルの説明に耳を傾けた。

「山田先生のISはデュノア社製“ラファール・リヴァイヴ”です。第二世代開発再興機の機体ですが、そのスペックは初期第三世代にも劣らないものです。現在配備されている量産ISの中では、最後発でありながら、世界第三位のシェアを持ち、装備によって、格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能です」

そうシャルルが説明を終えた瞬間：

ドカンッ！

空中でグレネード弾が爆発する音が響き、煙の中からセシリアと鈴が落ちてきた。

「あんだねえ！ 何面白いように回避先読まれてんのよ！」

「鈴さんこそ！ 無駄にバカスカと撃つからいけないのですわ！」

落下により発生したクレーターの中で二人は取っ組みあっていた。

「これで諸君にも教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するように」

着陸する真耶の所まで行き、千冬はそう言う。それからすぐに次の指示を出した。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事、では分かれる！」

そして生徒たちはそれぞれのグループに分かれた。

第九話 貴公子（後書き）

誤字、脱字がありましたらお願いします！

次回もよろしくお願いします！

第十話 ルームメイト（前書き）

やっと十話…

追いつくまであと三話です！

みなさん本当に申し訳ありません！そしてありがとうございます！

第十話 ルームメイト

その後のグループ演習を終え、クオヴレー、一夏、箒、セシリア、鈴、シャルルは学園の屋上で食事を取っていた。

「どうということだ」

箒が機嫌悪そうにそう言う。クオヴレーは話の内容が掴めていなかったため、何故箒が機嫌を悪くしているのか分からなかった。

「大勢で喰った方がうまいだろ？ それにシャルルは転校してきたばっかで右も左も分からないだろうし」

そして一夏がそう言う。それでクオヴレーはある程度の話の流れを掴んだ。最も箒の機嫌が悪い理由までは分からなかったが。

「えっと…、ホントに僕も同席して良かったのかな？」

と、そう考えていると、クオヴレーの隣に座るシャルルがそう言った。

「別に気にしなくていい」

「そつだ。男同士仲良くしようぜ」

クオヴレーと一夏がそれぞれそう言う。それからシャルルは微笑んでお礼を言った。

「ありがとう。クオヴレー、一夏。二人とも優しいね」

クオヴレーはフツと頬笑み、一夏は少し照れた様子だった。

「なーに照れてんのよ」

それに気づき、鈴がそう言う。一夏は慌てて言葉を返した。

「べ、別に照れてねえぞ」

それでも鈴は不審な視線で一夏を見つめるが、すぐに気を取り直し、手に持つ弁当箱のふたを開けた。

「おお！ 酢豚だ！」

「そう。今朝作ったのよ。食べたって言うてたでしょ？」

「ああ、サンキューな」

そう言うで一夏は鈴の弁当に箸をつけた。

「うん。うまい！」

「そう！ よかったあ！」

鈴がそう言う。箸はそんな鈴に対抗しようと言った。

「い、一夏！ そ、その、私も作ってきたのだが」

その声に振り向く一夏。箸の膝の上には手の込んだ作りのした弁当が置かれていた。

「おお！ うまそうだな！」

一夏が叫ぶ。箸は目を閉じそっぽを向いた。

「言っておくがついでだからな。私が食べるために時間を掛けて作ったものだ」

「そうだとしても嬉しいぜ。箸、ありがとう」

そう言つて一夏は箸の弁当に手を伸ばす。そして唐揚げを一つ掴み、口に運んだ。

「うん！ うまい！ これって結構手間がかかってないか！？」

「味付けは生姜に醤油、おろしニンニク、それと予め胡椒を少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな」

清々しい顔で箸が一夏にそう答える。それを鈴はグーツと睨んでいた。

「なんか、大変そうだね…」

「そうか？ 俺には楽しそうに見えるが…」

それを遠くから見ていたシャルルとクオヴレーがそう言う。

そんな時、クオヴレーはセシリアがバスケットからサンドイッチを取り出しているのが目に入った。

「セシリアはサンドイツチか？」

「はい。今朝作ってみましたの」

「へえ。おいしそうだねえ」

「ああ。そうだな」

二人は素直に感想を述べる。セシリアとしてもそう言われる事は嬉しかった。

「よろしければ、お一つどうぞですか？」

「え？ いいの？」

「ええ。作りすぎてしまいましたし」

「ありがとう」

「言葉に甘えさせてもらおう」

そして二人は卵サンドを一つずつ手に取った。

(それにしても、随分丸くなったな)

クオヴレーはそう思った。

以前までのセシリアならこんな事はありませんなかつただろう。これはクオヴレーの影響によるものだが、クオヴレー本人は自覚していなかった。

そしてクオヴレーはサンドイッチを一口齧った。

(!?)

一瞬にして空気が変わった。

(何だ…これは?)

何故卵サンドにバニラエッセンスが入っている。異常に甘いというよりも、そもそも卵とバニラエッセンスが合うはずがない。クオヴレーは横目で同じサンドイッチを食べたシャルルを見る。シャルルは顔を青くし、こちらに視線を向けてきた。

そんな二人を意に介した様子もなく、セシリアは語り始めた。

「たまにはこういうのも悪くないと思って作ってみましたの。それで、お味の方はいかがでした?」

セシリアが目を輝かせて尋ねる。よほど自信があるようだ。

「…悪くない」

「…お、おいしかったよ」

クオヴレーは表情に出さなかったが、シャルルはかなり冷や汗をかいていた。

「そつですか!」

セシリアは満足そうに頷いた。

（一体どうやって作ったのかは、聞かないでおこう）

クオヴレーは心の中でそう思った。

それから授業と夕食を終え、クオヴレーはベットに腰をおろしていた。

その時、部屋の扉がコンコンとノックされる。

誰だ？そう思いながらクオヴレーは扉を開ける。そこにいたのは真耶とシャルルだ。

「山田先生？ 一体どうしたんですか？」

「あ、はい。今日からゴードン君はデュノア君と一緒に部屋に住んでもらうことになりました。男子同士ですし、部屋も空いていますから」

クオヴレーの質問に真耶がそう答える。その答えにクオヴレーは疑問を持った。個人的判断ではあったが、クオヴレーが一人部屋の理由は、素性の知れない人間と誰かを相部屋にするのは危険だからである。

最も、それぐらいの信頼はおけるようになった、そう言えば一言で解決してしまうが。

そう考えているクオヴレーにシャルルが言った。

「どうかしたの？」

ハツとし、クオヴレーは首を振る。

(これ以上考えても仕方ないな)

「いや、何でもない。これからよろしく頼むぞ、シャルル」

「うん！」

満面の笑みを浮かべてそう答えるシャルル。

それからすぐにシャルルの引越し作業が始まった。

それから暫くし、シャルルの引越し作業は終了した。

「ふう、やっと終わった」

シャルルが一息ついてそう言う。そんなシャルルにクオヴレーが言った。

「ああ。そうだな」

そしてクオヴレーは立ち上がる。

「何か飲むかシャルル」

「え？ あ、うん！ ありがとう！」

そしてクオヴレーは一夏から貰ったお茶を持ってきた。

「これは？」

「？ 緑茶だが、知らないのか？」

「あ、うん。見たことは何回かあるけど」

それを聞いて、クオヴレーは心の中で相槌を打つ。ヨーロッパでは紅茶が主流であるのだ。そしてクオヴレーはシャルルに言った。

「紅茶の方が良かったか？」

「いやいいよ！ 一回飲んでみたかったから！」

そう言いながら、クオヴレーの手に持つ湯のみを受け取った。

「これが日本のお茶か？」

それからゆっくりと口に含んだ。

「紅茶とは随分違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「そうか、よかった」

クオヴレーは涼しい顔で答え、椅子に腰を下ろした。

「そう言えば、クオヴレーは放課後に一夏とISの特訓をしているって聞いたけど、そうなの？」

突然シャルルがクオヴレーに尋ねた。

「ああ。最も俺は鍛えている立場だが」

「へえ…、て、ことはクオヴレーってIS上級者なわけだね」

シャルルは納得したかのように言う。シャルルがクオヴレーのISを見たのは、クオヴレーが真耶を助けたほんの数秒だけである。そんな短時間ではあるが、クオヴレーの実力を理解するには十分な時間だった。

一瞬でISを展開させ、空を切り、目にも止まらぬ速さで宙を舞う。その卓越された動きはまさに百戦練磨であった。

だからこそ、次の言葉はシャルルを驚愕させるものだった。

「いや、俺はまだ初心者だ」

「ちよ！ 初心者！？」

「ああ、俺はISを使い始めてまだ一月も立っていない」

驚愕するシャルルに、クオヴレーは冷静に言葉を返す。

「一か月もたつてないって…。凄いなだね。クオヴレーは…」

そう呟き、シャルルは意を決したように言った。

「…あのさ、放課後の特訓、僕も一緒に加わっていいかな？ 専用機もあるし、一夏の特訓にも役に立てると思う。それに、クオヴレーを見てたら色々と勉強になりそうだから」

「それは構わないしありがたいが、俺を見ても学べるところなんてないぞ？」

「そうかな？ そう思ってるのはクオヴレーだけだと思うよ」

「？ そうなのか？」

自分が見本に慣れるような存在ではないと思っていたクオヴレーにとってシャルルの言った事は理解しがたい事であった。

そんなクオヴレーを見て、フッフとシャルルは笑った。

「？ 何か面白い事でもあったか？」

「ううん。別に何でもないよ」

(まあいいか…)

それからクオヴレーは時計を一瞥する。時刻はすでに8時を回って

いた。

「そつだシャルル。シャワーの順番はどうする」

「僕は後でいいよ」

「そつか。なら先に使わせてもらおう」

それから順番にシャワーを浴び、他愛もない話しをして今日一日は終わりを迎えた。

翌日

朝のSHR、教室の中はざわついていた。

「えつと、きよ、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました」

生徒たちのざわめきの正体、その視線に映るのは教壇に立つ真耶とその隣に立つ眼帯をつけた銀髪の少女。

（転校生、昨日の今日でか？）

クオヴレーは疑問に思う。それは他の皆も同じであり、教師である

真耶も同じ面もちであった。

だが、クオヴレーが抱いた疑問はそれだけではなかった。その銀髪の少女が纏うオーラ、身のこなし、勘ではあるが、他の生徒たちとは違う、軍人が醸し出すそれを少女は持っていた。

「ドイツからの留学生の、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

「挨拶をしる、ラウラ」

千冬がラウラにそう言う。ラウラは千冬に視線を向けて言った。

「はい、教官」

(教官…か…、なるほどな)

千冬の事を詳しく知っているわけではないが、二人がどういう関係なのかを理解するのは容易だった。

それからラウラは千冬から視線を戻し、自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラが口にした言葉はそれだけだった。

「…あの、以上…ですか？」

真耶がラウラに尋ねる。それにラウラは「以上だ」と即答、それから一夏を睨みつけた。

「貴様が…」

そう呟き、一歩一歩一夏のもとに近づいて行く。

そしてラウラはその右腕を振り上げた。

「やめる。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

それをラウラは頬に振り下ろそうとするが、突然の手に手を止める。

そして生徒たちの視線は一番後ろの左端の生徒に向けられた。

「何だ貴様は…」

「クオヴレー・ゴードンだ」

ラウラも感じ取った。この生徒たちの中で明らかに違うその雰囲気。クオヴレーが自分と同種の間人であると言う事を。

「貴様に命令される覚えはない」

「命令した覚えはないがな」

睨みあうクオヴレーとラウラ。一触即発、まさにそう言う空気だった。

「やめる。二人ともだ」

その間に千冬が入る。ラウラは仕方なく振り上げた手を下ろした。

（織斑一夏…、私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと…。認めるものか…！）

そしてラウラは一番後ろの席、クオヴレーの斜め後ろの席に座った。クオヴレーはラウラを横目で一瞥し、それから一夏、千冬と視線を向けた。

（ラウラ…ボーデヴィツヒか…）

第十話 ルームメイト（後書き）

ラウラ登場です！

そしてクオヴレーと千冬ねえさんの絡みがない（殴っ！

ラウラ関係で絡ませる予定です！申し訳ありません！

誤字脱字、矛盾点がありましたらよろしく願います！

次回もよろしく願います！

第十一話 明かされる真実 (前書き)

今回も駄文です おいっ！

とりあえず十一話です！

では

第十一話 明かされる真実

様々な蟠りを生んだSHRを終え、1組の生徒たちはアリーナで2組と共に合同実習を行っていた。

「見て見て！ 織斑君とデユノア君がやるみたいよ！」

「わあ！」

アリーナ内の女子たちがざわめきだす。その視線の中心には、オレンジ色に塗装されたIS“ラファール・リヴァイヴ・カスタム？”を展開したシャルルに白式を展開した一夏がいた。

一夏の特訓ということ、これから二人の模擬戦が行われるのである。

「いくよ、一夏」

「おう」

そして両者が動き出す。先手を仕掛けたのは一夏だ。

「うおおおお！」

一夏は距離を詰め、雪片式型を振り下ろす。シャルルはそれを左腕のシールドで防いだ。

『いいか一夏。攻撃を防がれた時はすぐに距離を取れ。そのまま武器を弾かれれば隙が生まれる。万が一弾き飛ばされればお前は武器

を失うことになる。それに、その隙を突かれ、シールドエネルギーが削られ、肝心な時に零落白夜が使えないとなったらどうしようもない』

その瞬間、クオヴレーの言葉を思い出し、一夏はすぐに剣を引き、一歩下がる。

そして構えを整え、雪片式型でシャルルをなぎ払おうとする。シャルルは華麗に宙を舞い、それを回避し空にあがった。

(さすがだね。まだ動きにムラがあるけど…)

それからシャルルはライフルを構え、一夏を狙い撃つ。一夏はそれをかわし、空を飛ぶシャルルに突撃。雪片式型を構え、振り下ろす。シャルルもそれを回避、追撃を掛けようとライフルの引き金を引くが…。

「あめえよ！ シャルル！」

一夏は空を旋回し、ライフルの弾を回避。そして一気に距離を詰める。

「行くぞ！」

再び雪片式型を振りあげる一夏。シャルルは、一夏が刀を振り下ろす瞬間に近づき、雪片式型の斬撃をシールドで防ぐ。一夏は一端距離を置こうとするが、それよりも早くシャルルが右足で一夏を蹴飛ばした。

「うまいな。シャルル」

それを下で見ていたクオヴレーが不意に呟く。それに対し、箒が答えた。

「ああ。あのタイミングで蹴りを繰り出すとは…」

「いや、そうじゃない」

「どづいうことだ？」

「一番うまいのは防いだ位置だ。蹴りなんて冷静に見極めれば避けられる。だからシャルルは足が一夏の視界から消える位置で攻撃を防いだんだ」

「つまり…、あの防御は目隠し」

隣で観戦していたセシリアが、啞然とした声でそう言った。それはそうだろう。あの刹那のタイミングの中で、シャルルはそこまで考えて行動していたのだから。

（最も…それでも蹴りが来ると見極める事は可能だ。腰の動き、体の傾き、それらの態勢の微小な変化。だが、それを理解するために必要なのは経験。今一夏が最も必要なもの…だな）

そしてシャルルはライフルの引き金を引いた。

「おしかったな。一夏」

降りてきた一夏に、筈が真つ先に声を掛ける。結局一夏は、それからなだれこむように撃ち込まれ、シールドエネルギーが尽きてシャルルに負けた。

「いや、俺の完敗だよ。…それにしても、シャルルって強いな」

「ううん。僕よりも一夏の方が。まだ初心者なのに、もうこんなに使いこなせているなんて」

「そうなのか？ あんま自分じゃ分かんないけど」

クオヴレーはそう言う一夏の傍まで近づいて言った。

「お前は強くなっている。代表候補生…といえるまでのレベルにはまだ達していないが、ある程度なら渡り合える」

クオヴレーのその言葉を聞き、一夏は自分の掌を見つめグッと握りしめる。

（強く…なってる？）

自分自身に問いかける一夏。だが、その眼には確かに自信が宿っていた。

「それにしても、一夏ってホントに凄い。とても初心者だとは思え無かったよ」

シャルルはクオヴレーにそう言った。

「だろつな」

「？」

「あいつは自分が弱いとと思っている。だから強くなるうと…、教えてもらうだけではなく、アイツはアイツなりに必死に考えている。そういう奴が一番上達が早い」

そしてクオヴレーは遠い目で一夏を見る。その時、突然女子の大声が聞こえてきた。

「ちよつとアレ見て！」

クオヴレーたちも女子たちが言う“アレ”に視線を向ける。そこには黒色に塗装されたIS“シュヴァルツェア・レーゲン”を展開させたラウラがいた。

(あれがボーデヴィツヒの専用機か…)

「ウソ。ドイツの第三世代じゃない」

「まだ本国のトライヤル段階だつて聞いていたけど」

その聴衆にラウラは全く動じず、一夏を見下した目で睨みつけた。

「織斑一夏」

「なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話しが早い。私と戦え」

「いやだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても、私にはある」

「今でなくて良いだろう。もうすぐクラスリーグマッチなんだから、その時で」

一夏のその答えにラウラは目を瞑った。

「ならば…」

その言葉とともに、肩に装備されたレールカノンが一夏に狙いを定める。

だが…。

「ならば…、なんだ？」

それが一夏に放たれることはなかった。

ISを発動させたクオヴレーが背後からラウラにリアム・シヨットガン突きつけていたのだ。

(…!? いつのまに!)

ラウラは自分の実力を過信してはいたが、警戒は怠ってはいなかった。

それなのにも関わらず、背後からライフルを突きつけられている。クオヴレーが自分と同種の人間であると言う事は理解していた。だが、根本的に何かが違う。ラウラはそう思った。

「貴様…、一体何者だ？」

「俺は、俺だ。それに質問をしているのはこっちだが？」

クオヴレーは何もないように淡々とそう答える。だが、ラウラを見つめるその目は鋭く冷たかった。

（なんだ…この目は…？）

ラウラは横目でクオヴレーを見つめる。その凍りつくような瞳に含まれる殺気をラウラは感じていた。

ちよつどその時…。

『何をやっているそこの生徒たち！』

放送がアリーナ全体に響き渡った。

そしてクオヴレーは構えていたライフルを下ろして言った。

「ボーデヴィツヒ。お前が何故一夏を敵視しているのかは知らないが、お前のやっている事は只無暗に力を行使しているだけだ。それで何か変わると思っているのか？」

ラウラはISを解除し、クオヴレーの方を振り向いて答えた。

「ふん、何も分かっていないのに説教でもしようというのか」

睨みあう両者。それから暫くしラウラが言った。

「…今日の所は引いてやろう」

そしてラウラは遠ざかって行く。それをクオヴレーは静かに見つめていた。

それから一夏たちの所に戻ったクオヴレー。一夏が真つ先にクオヴレーにお礼を言った。

「クオヴレー、サンキューな」

「別に、構わない」

クオヴレーはそう答え、空を見上げた。

(ラウラ・ボーデヴィット…)

それから決意したかのように顔を下ろし、クオヴレーは歩き始めた。

「どこに行くんだ？ クオヴレー」

「いや、少しな。心配するな、すぐに戻る」

そしてクオヴレーは、生徒たちの教導を指揮する千冬の傍までやってきた。

「織斑先生……」

「ラウラの事か？」

クオヴレーが呼びかけた瞬間、千冬が即答する。

「今日の放課後私の所に来い」

それから千冬はそう言った。

それから1日の授業を終え、生徒たちは解散。そんな中、クオヴレーは千冬に会いに行っていた。

「それで、ラウラの事だったな」

クオヴレーが一度相槌を打つと、千冬は語り始めた。

「…第2回モンド・グロツソ決勝戦当日。その日に一夏が誘拐される事件が起こった。私はその決勝戦を棄権、一夏を助けに向かった。見返りとして、私はその際情報を提供してくれたドイツ軍で教官を務めることとなった。その時だ、私がラウラと出会ったのは」

ラウラの千冬に対しての眼差し、一夏を助けるために千冬が決勝戦を棄権したと言う事実。ラウラが何故一夏を敵視しているのか、それが分かった。

ラウラは決勝戦を棄権せざるを得なかった直接の原因である一夏を憎んでいる。そう答えを導き出した。千冬の事を尊敬しているからこそ許せなかったんだろう。

クオヴレーがそう考えている中、千冬は話しを進めた。

「それから一年後、私は引退し、教師になった。…と、これぐらいしか語る事はないが満足か？」

「はい、ありがとうございます」

クオヴレーがそう言う。それ確認し、千冬は真剣な顔つきで言った。

「…お前から見て、ラウラはどうだった？」

千冬にとっての本題はここからだ。先ほどの内容を伝えるだけなら授業を終えた後でもできる。わざわざ放課後に呼び出す必要はない。

クオヴレーもそれを肌で感じ取り、それから今日一日のラウラを思い出して口を開いた。

「…ボーデヴィツヒは、自分のことを強いと思います。ですが、心のそこでは、弱いと言う事にも気づいている。彼女は強いのではなく強がっているだけ、そう感じました」

あの目に映っていたのは、一夏に対しての憎しみや千冬に対しての尊敬だけではない。羨望や苦惱、哀しみが含まれていた。

(強がっているだけ…か…)

その理由に千冬は心当たりがあった。

ラウラは千冬を目指していた。千冬こそが最強だと思っていたから。だが、ラウラは心の底では気づいている。自分が弱いと言う事。

『私にも弟がいる』

かつて千冬はラウラに「どうしてそこまで強いのですか？」そう尋ねられた。それに対し千冬はそう答えた。

その言葉の意味する事をラウラは理解していない。それが心の片隅にあるから、千冬の強さを理解していないから、ラウラは強がるしかないのだ。

千冬はそう考え、クオヴレーに言った。

「…ゴードン。お前にラウラのことを任せていいか？」

「…!? どういう事ですか？」

千冬のいきなりの言動に驚くクオヴレー。疑問は色々あるが、何故自分に頼むのか、それが一番分からなかった。

「…お前ならラウラを変えることができる、そう思った」

それは虚を突く回答。そんなことを言われるとは考えもしなかった。だがこの時、クオヴレーの頭の中にかつての記憶が過った。自分を变えてくれた人たちの姿が…。

「分かりました」

自分を変えてくれた人たちのように、自分も誰かを変えられるなら、クオヴレーはそう思った。そしてこの時、クオヴレーはラウラに昔の自分を重ね合わせた。

(似ているのかもなれない。昔の俺に…)

それからクオヴレーは一度頭を下げ、踵を返し歩いて行った。

(…頼んだぞゴードン)

そんなクオヴレーを見つめながら、千冬は心の中でそう呟いた。

それから自室に戻ったクオヴレー。部屋にはシャルルがいなかった。

(この音は…、シャワーか…)

水が流れる音が聞こえ、クオヴレーはある事を思い出した。

(そう言えば、ボディソープが切れていたな…)

クオヴレーはボディソープを取り出し、洗面所の扉を開いた。

「シャルル。ボディソープが切れているはずだが…」

そう言った瞬間、シャワールームの扉が開かれた。

「!?!? お前は…?!」

「へ…?!」

クオヴレーの目の前に居たのは、金のブロンドの長髪をした“女性”だ。それは紛れもなくシャルルだった。

「シャルル、一体…」

「きゃあああああ!」

シャワールームに女性の悲鳴が響いた。

それからすぐにシャワールームから出たシャルル。そしてクオヴレーとシャルルは自分のベッドに腰を下ろした。

顔を赤くし俯くシャルル。それに対し、クオヴレーは驚いた様子は

あるが、冷静を保っていた。

(なんか、女の子としての自信無くしちゃいそうだよ…)

そんなクオヴレーに、シャルルは少しそう思った。

そんな時、突然クオヴレーに声を掛けられた。

「シャルル…」

「は、はい！」

「お前が性別を偽っていた理由は、…何故だ？」

クオヴレーは「お前が性別を偽っていたのは、俺たちと接触するためか？」そう言おうとした。男性としてならクオヴレーや一夏と接触しやすい。この答えに行きつくのは容易だった。だが、これを言うのをクオヴレーは止めた。ここで核心をついてしまえば、シャルルは全て話さなければなくなる。だから敢えてこう聞いた。もしこの質問をシャルルが答えられなければ、クオヴレーはこれ以上言及するつもりはなかった。これから先の内容が機密事項なら、それを明かしてしまったシャルルは何らかの罰を受けることになる。軍人として生きてきたクオヴレーにとって、それは十分に理解していた。

そしてシャルルはゆっくりとクオヴレーの質問に答えた。

「…実家から…そうしろって言われて…」

「実家…。デユノア社か…」

「そう…。僕の父がその社長。その人から直接の命令でね」

「命令…」

「…僕はね。父の本妻の子じゃないんだよ…。父とはずっと別々に暮らしてたんだけど、2年前に引き取られたんだ。お母さんが亡くなった時、デュノアの家の人を迎えにきてね。それで色々検査を受ける過程でIS適性が高い事が分かって。で、非公式ではあったけれどテストパイロットをやる事になってね。でも、父に会ったのはたったの二回だけ。話しをしたのは一時間にも満たないかな…」

父と子。父というものが存在しないクオヴレーにとって、それがどういうものなのか、理解できても実感が持てなかった。それでも他の親子とは違うと言う事は理解できた。

(似ているのかもしれない。自らの息子を人形として扱ったあの男に…)

最も息子というのは形だけ、その実態はクオヴレーと同じ作られた存在。だが、それでも両者には通じるところがあるとクオヴレーは思った。

と、その時、シャルルが再び語り始めた。

「その後の事だよ。経営危機に陥ったのは…」

「経営危機？」

「そう。現在ISの研究は第三世代型が主流になってるからね。あ

そこも第三世代型の研究に着手はしてるんだけど、なかなか形にならなくて…、このままだと開発許可が剥奪されてしまうんだ」

「なるほど…：広告塔か…」

クオヴレーが呟く。

経営危機を脱出させるためには自社のISをアピールしなければならない。IS学園はその舞台にピッタリであり、男性として転入すれば注目度も高くなる。

「そう。あと、同じ男子なら、日本に出現した特異ケースと接触しやすい。その使用機体と本人のデータも取れるかもってね…」

そう言い、シャルルは自傷気味に微笑む。そんなシャルルを見つめ、クオヴレーは言った。

「お前は、これからどうするつもりだ？」

「女だつてことがばれたから、きっと本国に戻されるだろうね。あとの事は分からない。よくて牢屋いきかな」

「お前はこのままでもいいのか？」

「仕方ないよ…」

本当は仕方なくない。だが、これがシャルルの出せる唯一の答えだった。

そしてクオヴレーは理解する。シャルルの諦念を。

(これは間違っている)

悪いのはシャルルではない。だが、このまま人形のような生活を続けていれば、シャルルは自分を失くすことになる。

クオヴレーはシャルルに怒鳴った。

「違う！　…仕方ないなんてことはない！　いいかシャルル。誰にだって不自由なことはある。問題なのはそれとどう向き合うかだ。最初から自由になる事を諦めて、不自由と戦わずして目を反らしているお前に、自由なんてあるはずがない」

今まで一度も見た事のないクオヴレーのその雰囲気、シャルルは気圧される。

だが、同時にその言葉を心の奥底で感じ取る。

それが事実であるからこそ、心に刺さってくる。

それが事実であるからこそ、心に響いてくる。

「悪いのはお前じゃない。なら堂々とその不自由に向かって行けばいい」

クオヴレーの言葉に、シャルルは絞り出すような声で言った。

「僕は、僕は…どうしたら…」

クオヴレーは目を瞑って答えた。

「それは人それぞれある。シャルル自身で答えを見つuckerしかないことだ」

それからクオヴレーは立ち上がって呟いた。

「…IS学園特記事項、“本学園における生徒は、その在学中において、ありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない”」

「それって…この学園の…？」

「ああ。今、お前が女だと知っているのは俺しかいない。俺が黙っていれば、お前はここに居続けることができる」

「クオヴレー…」

「時間はある。答えはゆっくり考えていけばいい。俺も協力する」

そう言ってクオヴレーは微笑む。そしてシャルルは俯いて呟いた。

「ありがとう」

第十一話 明かされる真実 (後書き)

やっと…後二話

本当に申し訳ありません。 > (| |) <

誤字脱字、矛盾点がありましたらよろしく願います！

次回もよろしく願います！

第十二話 秘めたる思い（前書き）

相変わらずの駄文です。しかも題名も変です。

…すみません

とりあえず十二話です！後一話で追いつきます！

では

第十二話 秘めたる思い

クオヴレーがシャルルから秘密を明かされた後日、クラスでは大きな話題で盛り上がっていた。

「ねえ、あの噂聞いた？」

「噂？」

「そう。実は今月のトーナメントで優勝すると織斑君と付き合えるんだって！」

「ウソ！ ホントに！」

その中には二組であるはずの鈴も混じっていた。そしてそれから眺めているクオヴレーはシャルルに呟いた。

「一体何を盛り上がってるんだ？」

「さあ……」

織斑君という単語から、一夏に関係ある事だとは分かっていた。だが、それだけである。クオヴレーはその女子の集まりに聞こえずるが、その時、別のグループからの声が耳に入ってきた。

「何か…、話しが歪んで広まってる……」

「あなた、また適当な事言ったんじゃないの？」

「あれ…？ そんなことないと思うけどなあ」

振り向いたクオヴレーの視線の先に映ったのは、黒紫色の短髪の女性に、茜色の髪を後ろで二つ結った女性に、珊瑚色の髪を短く左右で結ったダボダボの制服を着た女性の三人だ。

そしてクオヴレーはその三人に近づき、声を掛けた。

「布仏、相川、谷本」

その言葉に三人はハツとした。

「あ！ クオヴ〜！」

ダボダボの服を着た少女、布仏本音が真っ先に反応した。

「一体どういう事か…説明してもらおう」

それからクオヴレーがそう言う。それに三人の真ん中にいる茜色の髪の少女、谷本癒子が答えた。

「実は昨日、偶然篠之乃さんが織斑君に告白しているのを聞いてちゃつて…。それを噂したら、だんだん歪んでいって…。気づいたら“今月のトーナメントで優勝すると織斑君と付き合える”って言う事になったの」

それに黒紫色の髪の少女、相川清香がうんうんと二度頷く。クオヴレーは話しの内容を大体理解できたが、二つだけ分からない事があった。

「大体は分かったが、優勝したら一夏は何を付き合うことになってるんだ？」

クオヴレーはそう尋ねる。『筈は何を一夏に告白したのか？』という疑問もあったが、それはプライベートに関わるため聞かなかった。

そして、尋ねられた三人はというと…。

「「「は？」」」

見事に三人同時に首を傾げた。それから三人は後ろを振り返り、ヒソヒソ話を始める。

「ねえ、もしかしてクオヴレー君って…？」

「すごい。大発見かも」

「クオヴは天然さんだ」

「一体どうかしたのか？」

そんな三人を不審に思い、クオヴレーが口を出す。その瞬間、三人はスツとクオヴレーに向き返った。

「何でもないよ！ 何でも！」

「そうか」

(よく分からないが、何もないなら良いだろう)

そしてクオヴレーは自分の席に向かおうとする。その時、クオヴレーはシャルルに呼び止められた。

「ねえクオヴレー、思ったんだけどさ」

「なんだ」

「やっぱりクオヴレーって天然？」

「？ 天然？」

そう言葉を返すクオヴレーを見て、シャルルは微笑を浮かべた。

そしてクオヴレーはある事を思い出す。

(そう言えば、何を付き合う事になったのかを聞くのを忘れていたな…)

気づいたが聞きに行こうとはしなかった。学生間の話であるため、危険なことではないだろう。クオヴレーはそう結論付けた。

ちょうどその時、話題の要因である筈はというと…

(何故こんな事になっている…！)

頭を抱えて悩んでいた。

ちなみに、今日は昨日の告白があり、箒は一人で先に登校して来た。

(優勝して一夏と付き合えるのは私だけのはずだ！)

それから箒は拳を握りしめる。

(と、とにかくだ。私が優勝すれば問題ない…。優勝すれば…)

そこで箒の頭を過つたのは、銀髪の少年“クオヴレー”の姿。強敵は数ほどいるが、優勝するための一番の障壁は間違いなくクオヴレーである。

そこで箒は弱気になっている自分に気づき、首を振って気持ちを切り替える。

(弱気になってどうする！ 大丈夫だ！)

そもそもクオヴレーが優勝すれば一夏と付き合つという話しそのものがなくなる。だが、今の箒の頭にあるのは、己に勝つという決意と、絶対に優勝すると言う執念だった。

ちょうどその時、教室の扉を開けて一夏が入ってきた。

「おはよう」

箒はハツとし、一夏の方を向く。そこには普段となんら変わらない一夏がいた。

「なーに盛り上がってんだ」

一夏がそう言った瞬間、周りの生徒たちが一目散に退散して行った。「じゃあ、私自分のクラスに戻るから」

鈴も明後日の方向を見ているかのようにそう言って、教室を出て行く。

「一体何だ？」

一夏は不思議そうにそれを眺めていた。

その日の放課後、鈴は自主練のため第三アリーナに向かっていた。

（一夏と付き合うのは私、一夏と付き合うのは私…！）

優勝すれば一夏と付き合える。それが鈴のやる気がかつてないほど向上させていた。

そして第三アリーナに着いた鈴。だが、そこにはすでに先約がいた。

「セシリア！」

「鈴さん」

ブルー・ティアーズを展開させ、射撃練習に勤しんでいたセシリアはその声で振り返る。鈴はセシリアの所まで近づいて行った。

「なに？ あんたも学年別トーナメントに向けて特訓してきたの？」

（もしかして…、こいつも一夏を…？）

「出るからには優勝したいとは思ってます。ですが、一夏さんのあの件とは全く関係ありませんからご安心を」

鈴が考えている事を察し、そう答えるセシリア。それから空を見上げた。

「ただ、もつと強くなりたい。それだけですわ」

その時、セシリアと鈴はこの第三アリーナに新しい来訪者が来たことに気がつく。そして二人はその来訪者に視線を向けた。

「ドイツ第三世代“シュヴァルツェア・レーゲン”」

「ラウラ…ボーデヴィツヒ…」

そこにはISを発動させたラウラがいた。鈴は万が一に備え、自らのIS“甲龍”を展開させた。

「…何か用でも？」

突然のラウラの来訪に動揺するも、セシリアは冷静を装い尋ねた。それに対し、ラウラは何喰わぬ顔で言った。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか…、フン、データで見た時の方がまだ強そうではあったな…」

「何？ やるの？ わざわざドイツからやってきてボコられたいなんて、大したマゾっぶりね！ それとm「待って下さい鈴さん」…セシリア!？」

ラウラの挑発に言い返している鈴をセシリアが止めた。

「何で止めんのよ!」

「少し、お話したいことがあります…」

そしてセシリアは真っ直ぐラウラを見つめた。

「ボーデヴィツヒさん、わたくしはあなたのことはなにも知りません。あなたが何故一夏さんを敵視しているのかも…」

そしてセシリアは少し前の自分を思い出す。あのクラス代表決定戦があった翌日の日までの自分を…。

「わたくしは少し前まで、女尊男卑が絶対だと思っておりました。ですがある時、わたくしは教わりました。自分の目でちゃんと見て、そうして人を理解すると言う事の大切さを。あなたは一夏さんの事を何も分かっていらっしやらない。ですか」「下らんな」「

セシリアの言葉をラウラが遮った。

「貴様もあの銀髪の男と同じだな。何も知りもしないで説教とは…」。

まあいい、特別に教えてやる。私はあの男のことを何一つ分かったくはない。理解したくない。今すぐにも消してやりたいとさえ思っている」

ラウラの殺気を肌で感じ、言っている事が本気だと言つ事をセシリアは理解する。そしてある一つの決心をした。

「……もしも、もしもわたくしたちが勝ったら、その考え改めてもらえます。よろしいですか？」

「ふん。あり得ん事だな」

「よろしいですか？」

セシリアの目に映っていたものは揺ぎ無い決心。鈴はそれを見つめ思った。

（セシリア？ これが？）

普段のセシリアとはなにかが違う。そう思つると同時に、セシリアの姿が一瞬クオヴレーと重なった。

セシリアがクオヴレーに似ている。鈴の脳裏ではそう判断したのだ。

そして一つの仮定を鈴は見つけ出す。

（もしかして…、もしかしてセシリアって一夏と同じくらいクオヴレーの影響を受けているのかも…）

鈴がそう考えている内に、ラウラは回答を出した。

「いいだろう。貴様らが勝てばな…」

「では、行きます！ ……鈴さん！」

鈴は考えるのを止め、セシリアの合図に合わせた。

「分かってるわよ！」

ほんの少しだけ、何となくだがセシリアの事を頼もしいと鈴は感じた。

その頃、クオヴレー、一夏、シャルルは三人でアリーナに向かっていた。

「今日も特訓するよね？」

「ああ、トーナメントまで日がないからな」

シャルルと一夏が言葉を交わす。ちょうどその時、三人の隣を女生徒たちが駆け抜けて行った。

（何かあったのか？）

何も無いのにわざわざ急ぐはずがない。しかも今は放課後である。

クオヴレーがその女子たちの不審な行動を考えている時、別の生徒が言葉を交わしながら駆けて行った。

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦やってるって！」

「「え？」」

一夏とシャルルが同時に声を上げる。クオヴレーは背筋に悪寒を感じた。

(嫌な予感がする…)

「急ぐぞ！ 一夏、シャルル！」

そして三人も第三アリーナを目指し走り出した。

それからすぐに三人は第三アリーナの観客席にたどり着く。それほどほぼ同時に箒も辿り着いた。

「箒」

一夏が名前を呟いた瞬間：

ドカンッ！

爆発音がアリーナ全体に響いた。

そして爆煙が晴れて行き、その先に映る三つの影にクオヴレーたちは驚く。

「セシリア！ 鈴！ それにラウラ！」

一夏が叫ぶ。そしてクオヴレーは自らが感じ取った嫌な予感の正体を理解した。

（相手はボーデヴィツヒか…）

セシリアと鈴の二人がかりでもラウラには勝てない。それがクオヴレーの分析だった。それほどまでにラウラと他の代表候補生の実力はかけ離れていた。

この時のクオヴレーの心配はこれだけだった。これが模擬戦であるからだ。だが、これがクオヴレーの致命的な油断だった。

「さすがに、一筋縄ではいかないわね」

「そうですね」

2対1でも余裕を見せつけるラウラに、実力の高さを再認識する二人。

そして鈴はセシリアに言った。

「いい。私が龍砲で隙を作るわ。いくらアイツでもこの衝撃砲はそう簡単には避けられないはず。その隙をあんたがつく。いい？」

「分かりましたわ！」

セシリアは四つのビット兵器“ブルー・ティアーズ”を発動させ、鈴は肩部に展開されてある衝撃砲“龍砲”の狙いをラウラに定める。

「喰らえ！」

空気の圧縮する音が響き、ラウラ目掛けて衝撃砲が放たれる。

(衝撃砲か…、だが！)

そしてラウラは右手を前に突き出し叫んだ。

「無駄だ！ このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな！」

その瞬間、突き出した右手の掌を中心に、結界“AIC”が発生する。

「まだですわ」

その隙を突き、セシリアはブルー・ティアーズで狙い撃つ。

だが、ラウラはそれを軽やかに回避。そしてワイヤーブレードを出

現させ、セシリアを迎撃する。

セシリアの弱点はブルー・ティアーズの発動中は自身が動けなくなってしまうこと。そのままワイヤーはセシリアの首に絡みついた。

「セシリア！」

叫ぶ鈴。それに気を取られ、ラウラから目を離してしまう。ラウラはその隙を見逃さなかった。

右肩のレールカノンが鈴目掛けて放たれた。

「ぐわあああ！」

吹き飛ばされる鈴。そしてラウラはプラズマ手刀発動させて、セシリアに突きたてる。

「ふん。残念だったな。貴様の負けだ……」

そして手を大きく振り上げた。

（わたくしは……）

セシリアはクラス代表決定戦の翌日、クオヴレーに見て知る大切さを教わった。だがこの時、セシリアの中で小さな炎が灯った。自らが気づかないほど小さな炎。

セシリアにとって、クオヴレーは自らの目標となったのだ。IS操縦者としての実力だけじゃない、本当の強さを持っているとセシリアは思った。

これに気づくのは早かった。気づいた時は、自分はいつもクオヴレ
ーのを見ていたからだ。だが、だからこそ自分の限界に気づい
た。

自分では一生あの領域にはたどり着けない。そう思えるほど、クオ
ヴレー・ゴードンという男は住む世界が違っていた。

だが、織斑一夏、彼の存在がセシリアの闘志を再び燃え上がらせた。
自分はまだ強くなれる。どこまでも強くなって行く一夏を見て、セ
シリアはそう思い始めたのだ。

そしていずれ、自分の翼があそこまで届くように…。

それは誰も知らない。セシリアの秘めたる思いだった。

(わたくしは…こんな所で…)

「セシリア！」

鈴は双天牙月を展開、セシリアを助けるためにラウラに突撃する。

ラウラはプラズマ手刀を解除し、向かってくる鈴に掌をかざす。

「頭に血が昇ったか」

「しまった！」

慣性停止結界により動きを停止させた鈴の首に、ワイヤーブレード

のワイヤーがセシリアと同じように絡みつく。

「ふん。所詮はこの程度」

そう呟き、ラウラはセシリアを地面にたたきつけ、鈴の顔を殴った。それからまさにサンドバックのように鈴は殴られ、セシリアは蹴られ続けた。

「酷い！ アレじゃシールドエネルギーが持たないよ！」

リンチとも言えるその状況を見てシャルルが叫ぶ。それに頷き箒が言った。

「もしダメージが蓄積し、ISが強制解除させられることになれば、二人の命にかかわるぞ」

命にも関わる。それはラウラも分かっている。だが、ラウラの攻撃は全くとどまる事を知らない。

「止める！ ラウラ！」

一夏はアリーナのバリアを叩きながら叫ぶ。その時だ…

「下がっている、一夏」

振り返る一夏。そこにはISを発動させたクオヴレーがいた。

「クオヴレー！」

そしてクオヴレーは手にZ・Oサイズを握り、アリーナのバリアを切り裂く。

それと同時にクオヴレーは武装をZ・Oサイズからラウム・シヨットガン変換させ、ラウラを狙い撃った。

ラウラはその気配に気づき、AICを発動させラウム・シヨットガンの弾丸を防いだ。

そして、それと同時にセシリアと鈴のISが強制解除され、地面にストンと倒れた。

「貴様がクオヴレー・ゴードン」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

そして二人が対峙した。

第十二話 秘めたる思い（後書き）

戦闘シーンがやはり難しいです。しかも短い おいつ！

今回はクオヴレーVSラウラです。

誤字脱字、矛盾点などがございましたお願いします！

これからもよろしくお願いします！

第十三話 生まれた意味と生きる意味（前編）（前書き）

やっと追いつきました！みなさん本当に申し訳ありません！

ですが駄文なところは相変わらずです！ おいっ

すいません

第十三話 生まれた意味と生きる意味（前編）

対峙するクオヴレーとラウラ。

それからコンマ数秒後、ISを発動させた一夏がセシリアと鈴の救出に向かう。

その際、ラウラは一夏に目もくれなかった。

一瞬でも気を緩めればその瞬間に勝負がつく、本能と経験でそれを理解していたからだ。

そして救い出されたセシリアと鈴は一夏に言った。

「一夏…」

「無様な姿をお見せしましたわね…」

「良かった、二人とも意識はある」

そう言い一夏はクオヴレーとラウラの方に視線を向けた。

（ラウラ…！）

ラウラが敵意を向けているのは自分である。もし、二人が狙われた原因が自分であるならば、これ以上自分のせいで誰かを巻き込むわけにはいかない。一夏は雪片式型を握りしめる。

だがその時、クオヴレーが静かに掌をこちらに向けてきた。

「一夏は二人を頼む」

「クオヴレー…」

一夏は眩き、クオヴレーを見つめる。その眼差しは真っ直ぐラウラを見つめていた。

(……クオヴレー……)

そして一夏は決意し、セシリアと鈴を抱えて箒とシャルルの所に飛んで行った。

「箒、シャルル！ 二人を医務室へ連れてつてくれるか？」

「一夏。お前はどつするのだ」

箒の問いに一夏はクオヴレーとラウラの方を向いて答えた。

「俺は…、この二人の戦いを見届けたい…」

これが一夏の決意。箒とシャルルは一言相槌を返し、二人を連れて医務室へ向った。

「他人を気に掛ける余裕があるとはな……」

そのやり取りを一部始終見ていたラウラは皮肉を込めてクオヴレーにそう言う。

それにクオヴレーは単調に答えた。

「油断はしていない」

それは事実。なぜならクオヴレーが神経を傾けていたのは最初からラウラだけではなかったからだ。

そしてクオヴレーは導き出した答えを口に出す。

今しかない、否、今でなければならぬ。

ラウラに伝えなければならない事、それを伝えるのは…。

だが、それは言葉では伝わらない。正確に言えば、言葉だけでは。

ラウラの根本にあるものは力。だからクオヴレーはこの選択をした。

「来い！ ボーデヴィツヒ！」

「ふん！」

ラウラはレールカノンの狙いをクオヴレーに定める。

「行くぞ！」

ラウラが叫ぶのと同時に、レールカノンが放たれた。

その時、それを別のモニターで見ている二つの人影があった。

「止めなくてよろしいんですか？ 織斑先生」

それは千冬と真耶だった。

アリーナのバリアまで突き破る事態となつては教師として黙認して置くわけにはいかない。真耶の言動はもっともだった。

千冬もそれは十分理解できた。だが動かなかつた。

「ゴードンなら、大丈夫です」

それは答えになっていない。だがそう言い切る千冬の顔には説得力があり、それは真耶に物言えぬ安心感を抱かせるほどだった。

（なんだろうな…、この感じ…）

千冬が動かなかつた本当の理由、それはクオヴレーの決意を感じ取つたからである。

だが、それでも普段の自分なら止めに行くだろう。

千冬が真耶に言った理由はウソではないが、それでも私情を優先するよつなマネはしない。

そう考えている千冬に、真耶が不意に言った。

「織斑先生って、ゴードン君の事を凄く信頼しているんですね」

(? 信頼…?)

真耶の言葉に、千冬は呆気にとられる。そして思い出した。

ラウラの事をクオヴレーに任せた時、千冬はクオヴレーならラウラを変えられると思った。ラウラの本質をクオヴレーが見抜いていたからだ。だがそれだけではない。その時、千冬は心のどこかでクオヴレーの事を信頼していたのだ。

そして今も…。

(信頼…か…)

千冬は人を信用することはあるが、信頼するのはごく限られた人間だけであった。しかもまだ出会って少ししかたっていないクオヴレーを、信頼できるほどの時間があつたわけでもなければ、理由もなかった。

ただ、なんとなくだが、悪くない。そう千冬は思った。

放たれたレールカノンをクオヴレーは軽やかに回避。同時にラアム・シヨットガンでラウラを狙い撃つ。

だが、それはA I Cにより防がれる。

(ダメ…か…)

“ A I C ”、クオヴレーはそれについて、結界内のものの動きを止める程度の事しか分かっていなかった。

最も肝心なのは発動条件。それだけの能力である以上、それなりの発動条件がある。

相手の攻撃に合わせて仕掛ければ、結界を張る前に攻撃が通るとクオヴレーは踏んでいたが、その考えは見事に打ち砕かれる。

「言うておくが、その程度の攻撃では私にかすり傷つけることはできんぞ！」

「どつやらそのようだな。…だが！」

クオヴレーはビット兵器、ガン・スレイヴを展開した。

「狙いはもつついている…！」

一斉に襲い掛かるガン・スレイヴの非実弾を、ラウラは縦横無尽に空を駆けて回避する。

(速い…！ それにこれでは…！)

A I C、それはI Sに搭載されているP I Cを発展させたもので、対象を任意に停止させることができ、1対1では反則的な効果を発

揮する。

だが、使用には多量の集中力が必要であるという致命的な弱点が存在する。つまりラウラの力量では、クオヴレーとガン・スレイヴによる正確無比の弾丸をかわし続けながら、空を縦横無尽に飛び回って狙い撃つてくる六機のガン・スレイヴの動きを止めることは不可能なのである。

それを遠くで見っていた一夏は絶句する。

自分もガン・スレイヴによる攻撃をクオヴレーにされた事はあるが、ビットの機動力、弾の速さ、精度、全てにおいて自分の時よりも上である。

そしてそれを回避し続けるラウラ。分かっていた事ではあるが、自分はまだまだ弱い、そう実感した。

「くっ！」

そう一夏が考えている中、シュヴァルツェア・レーゲンの、シールドエネルギーは少しずつ削られていく。

このままでは時間の問題、相手の攻撃が切れるよりも自分のシールドエネルギーが切れてしまう、ラウラは理解していた。

（何故…！ こんなにもこの男は…！）

最初からただものではないと言う事は理解していた。そして、その時からラウラはクオヴレー・ゴードンにイラつきを覚えていた。

自らと同じ空気を醸し出すにも関わらず、個というものを誰よりも強く持っていた。

自分に最も近く、最も遠い存在。

そしてラウラは覚悟を決める。瞬時加速を使用、無理やり弾幕をくぐり抜けた。

(遠距離なら、私に勝ち目はない…！ ならば、近距離で！)

ラウラのIS“シユヴァルツェア・レーゲン”は近・遠距離両方可能なオールラウンダー。とは言え、武装やAICの特性を考えれば遠距離に徹した方が良く、その中でも近距離戦を選択せざるを得ないほど、ラウラは追い込まれていた。

そしてラウラは両腕にプラズマ刃を展開させ、クオヴレーに切りかかる。

クオヴレーはそれを左に旋回し回避。Z・Oサイズを握り、ラウラに振るう。

「遅い！」

ラウラもそれを回避。だが…

「撃ち碎け！」

クオヴレーは武装をZ・Oサイズからラアム・ショットガンに変更し、ラウラに追撃を掛けた。

バンツ！ バンツ！ バンツ！

三発の銃弾が至近距離から命中。シュヴァルツェア・レーゲンの装甲はボロボロになる。

そんなラウラにクオヴレーは言った。

「お前は何故、戦っている？ お前の力は何のためにある？」

「それが私の…作られた意味だ！」

ラウラは答え、立ちあがる。

（私は…私は負けるわけにはいかない…。絶対に…！）

だんだんと迎えてくる限界、その極限の状況の中、ラウラはクオヴレーを睨みつける。

そして気づいた、自分の抱いていたイラツキの根本を、クオヴレーを倒せなければ先へは進めないということ。

最初見たと時から頭から離れなかった存在。

闇を照らす光のように輝き続ける疎ましい存在。

それは自分の可能性であり、自らを照らす、希望という名の光だった。

（力が、欲しい…）

ちょうどその時、ラウラの脳内に声が響き渡る。

『願うか？ 汝、より強い力を欲するか？』

そしてラウラはゆっくりと願った。

(……よこせ…力を…！)

《VTシステム起動》

ドクンッ！

(デイス・レヴが…反応している…！?)

突然反応しだすデイス・レヴ。それにクオヴレーが気づいた瞬間、ラウラのISに異変が起こる。

「あああああ！」

迸る電流と共に奇声を上げるラウラ。そしてシュヴァルツエア・レーゲンを黒い異形が包み込む。

『非常事態発生です！ 直ちに模擬戦は中止！ 生徒たちは速やかに避難してください！』

その瞬間、アリーナ内に真耶の放送が響き渡り、生徒たちが慌てて避難する。

そしてシュヴァルツエア・レーゲンは黒い全身装甲のISに姿を変えた。

(あの武器は…)

その手に握られている武器の形状。それは白式の雪片式型に酷似していた。そして推論を立てる。

(アレは…織斑千冬…)

この世界で雪片と名のつく武器を扱ったIS操縦者は千冬と一夏しか知らない。そのため、クオヴレーはアレが千冬のデータをもとにしているであろうと推測を立てたのだ。

別の場所で変わり果てシユヴァルツェア・レーゲンを見つめる一夏。その顔には驚愕だけでなく悔しさと怒りが浮かび上がっていた。

「アレは雪片…。千冬ねえと同じじゃねえか…！」

一夏はそう呟きISを発動させようとする。だが、そんな一夏の行動を遮る様に、スツと腕が目の前に出される。

「千冬ねえ！」

そこにいたのは千冬だった。

「避難命令は出ているはずだ。何をしている」

そして千冬は一夏にそう言う。だが、千冬も何故一夏がここにいるか、何をしようとしているのか、全て理解していた。

「でも、アレは！」

一夏は間を置かずに答える。そう言い返してくるのはだいたいの予想が着いていた。一夏の事を誰よりも理解しているのは千冬なのだから。

そして千冬も答えた。

「分かっている。私も、おそらくゴードンも……」

千冬がそう答えた時、突然クオヴレーの声が耳に入ってきた。

「一夏、悪いが俺にやらせてくれ」

「クオヴレー！」

一夏は声を張り上げ、クオヴレーの方に視線を向ける。そこには大鎌で黒い刀を受け止めているクオヴレーがいた。

「ボーデヴィツヒは、…昔の俺と同じだった……。生きる意味を見失ったときの俺と…。だが、俺には教えてくれる人がいた」

自分が戦うために造られた存在だと知った時、自分に生きる意味について教えてくれた、もう一人の自分と呼べる存在。

そしてクオヴレーは刀を弾き距離を取る。

「俺は、……助けたい」

あの虚な闇の底。自分の存在意義もわからず、居場所も見いだせない。ラウラはずっとそこにいて、自分の意味を戦いでしか証明できなかった。それが自分の作られた意味だから。

そしてクオヴレーの言葉を聞いた一夏は一度目を閉じる。

クオヴレーの言葉を完全に理解しきれたわけではない。

だが、普段あまり感情を表さないクオヴレーの声が歪んでいたのだ。心の底からの悲痛で……。

そして一夏は目を開いた。

「頼んだぞ！ クオヴレー！」

「ああ！ ……来い！ ラウラ！」

クオヴレーがそう言った瞬間、黒いISは刀を振り落とす。

クオヴレーはそれを大鎌でゆっくりといなし、その刀は地面をズドンッと叩いた。

千冬がISを操縦している所は一度も見た事がないクオヴレーだが、この斬撃が全くの別物だと言う事は分かる。

この世界で自分が始めて出会った女性。強い心と、不器用な優しさを持ち、この世界で本当の意味で一番強い存在。

覚悟、想い、自信、誇り…、何も無い、ただ織斑千冬のように刀を振っただけ、剣というものに馴染みのないクオヴレーでも十分に対応できるほど、その刀は軽かった。

そしてクオヴレーはZ・Oサイズを振り上げる。

「切り裂け！ Z・Oサイズ！」

振り下ろされる大鎌が、そのISの黒い装甲を縦に切り裂いた。

刹那、そのISの動きは止まり、電気が進むと、その切り口が真っ二つに両断されていく。

クオヴレーはそこから倒れてくるラウラを受け止め、静かに微笑んだ。

第十三話 生まれた意味と生きる意味（前編）（後書き）

みなさん本当に申し訳ありません！やっと追いつくことができました。

次回の分も出来ていますので、明日投稿する予定です。

誤字脱字、矛盾点がありましたらお願いします！

これからは更新遅くなるかもしれませんが、絶対に消しませんので

よろしくお願いします！

第十四話 生まれた意味と生きる意味（後編）（前書き）

やっと続きです。みなさま本当に申し訳ありません。そしてありがとうございます！（T—T）

相変わらずの駄文です。これから投稿遅くなるかもしれません。

こんなどうしようもない奴ですが、これからもよろしくお願いします！

とりあえず、第十四話です。

では

第十四話 生まれた意味と生きる意味（後編）

クオヴレーとラウラの戦闘は、VTシステムの起動によるラウラの暴走などがあつたものの、大惨事にはならず終了した。

そしてクオヴレーと一夏は、治療を受け終わりベッドから体を起こしているセシリアと鈴、それを看ていた篤、シャルルがいる医務室にやって来ていた。

「二人とも無事そう良かったよ。鈴、セシリア」

一夏が安堵したようにそう言う。二人とも腕や頭に包帯を巻いているが、どれも深刻な怪我ではなかった。

それに対し、鈴が言った。

「それよりも、あんたたちも、大変だったみたいね」

ラウラについてのことだと理解したクオヴレーと一夏。その言葉に一夏が答えた。

「俺は何もしていないよ。全部クオヴレーのおかげだ」

そう答える一夏だが、身を切られる思いで二人の戦いを見ていたのは間違いない。

一夏はその思いを表には出さず、セシリアと鈴に尋ねた。

「そう言えば、何で二人はラウラとバトルすることになったんだ？」

不意なことであり、セシリアと鈴は一瞬驚く。それから鈴はセシリアを横目で見つめた。

（セシリア…）

これは鈴の口から伝えることではない。そう思い、鈴は黙り込む。

それからすぐに、セシリアは口を開いた。

「……大したことではありませんわ」

（大したことではない…か…）

クオヴレーの目に映ったのは、セシリアの沈んだ瞳。

何が原因で戦っていたのかは分からないし、戦った理由は本当に大したことではないかもしれない。だが、あの戦い自体は間違いなくセシリアにとっては重いものである。その瞳が意味しているものを、クオヴレーは感じ取った。

そしてクオヴレーがそう思考していた時、セシリアの頭の中には己の無力さ、負けた悔しさが渦巻いていた。

そしてそれがセシリアの沈んだ瞳の正体である。

強くなりたいと本気で望んでいたからこそ、それはより重くのしにかけてきたのだ。

俯くセシリア、そんなセシリアに一夏が声を掛ける。

「どうかしたのか？ セシリア」

ハツとし、セシリアは作り笑いを浮かべた。

「い、いえ、何でもありませんわ」

（言わない…、いや、言えないのか…）

安心はできなかったが、これ以上追及することもできなかった。

それからクオヴレーは立ち上がる。

「ラウラのところか…？」

「ああ、二人も無事そうだしな」

そしてクオヴレーはラウラの運ばれた医務室に向かった。

ちょうどその時、ラウラは別の医務室のベッドの上で意識を取り戻す。

「私は…」

「気がついたか…」

聞きなれたその声の方向に、ラウラは視線を向けた。

「教官…、一体何が…」

そこには椅子に座っている千冬がいた。

「一応重要案件ではある上に、機密事項なのだが…。VTシステムは知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム…」

「そう。IS条約でその研究は愚か、開発、使用、全てが禁止されている…。それがお前のISに積まれていた…。精神状態、蓄積ダメージ、そしてなにより操縦者の意思…、いや、願望か…。それらが揃うと発動するようになっていたらしい」

それを聞き、ラウラはシートをギュッと握りしめる。

「私が望んだからですね…」

ラウラの声は震えていた。自分の心の弱さ、それに気づいたからだ。そんなラウラに千冬は叫ぶ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、は…」

「お前は誰だ？」

その言葉にラウラは呆気にとられる。

「…私は……」

「誰でもないならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴ
イツヒだ……」

そう言つて千冬は立ちあがる。

「お前は私になれないぞ」

それからそう言つ千冬。その顔はこれまでになく優しかった。

そして千冬は出口に向かって歩き出す、が、その足は途中で止まっ
た。

「ああ、それとだラウラ。もう一人、見舞いがいるみたいだぞ」

「へ？」

素つ頓狂な声を上げ、ラウラはベッドから体を起こす。それからす
ぐに医務室の扉が開き、銀髪の少年が中に入ってきた。

「クオヴレー・ゴードン……」

ラウラはクオヴレーと目があつた瞬間、目を背ける。

まだラウラには心の整理がついていない。今日の出来事を思い出し、

クオヴレーを直視する事が出来なかったのである。

そんな中、千冬はクオヴレーに耳打ちをする。

「お前、一体いつから聞いていた？」

「…最初からです」

「……気を遣わせたな」

「いえ、構いません。それに俺も盗み聞きしていたわけですから」

千冬はフツと笑い、クオヴレーに言った。

「言いたい事があるんだろう？ 早く言って来い」

分かるか分からないかぐらいの軽い相槌を打ち、クオヴレーはラウラのもとへ足を進める。

（あとは任せたぞ。ゴードン…）

そして千冬は医務室を出て言った。

「何の用だ」

ラウラは目を合わせず、自身のシートを見つめながら言った。

「お前と話がしたい」

クオヴレーは、先ほどまで千冬が座っていた椅子に腰をおろしてそ

う言っ。

ラウラはクオヴレーの言葉に何も返さず、俯きシートを見つめ続けた。何と言葉を返していいのか分からなかった。

それからラウラは言葉を選び、クオヴレーに言った。

「…話しとは、何だ？」

その結果選んだラウラの選択は、従順に話しを聞くことであった。

そしてクオヴレーはラウラに尋ねた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…。お前は生きる意味について考えた事はあるか？」

「生きる…意味…？」

「そうだ。お前はさっきの戦闘で、自分の事を戦うために作られた存在だと言った。だが、生まれた意味はどうであれ、生きる意味はお前が作り出すものだ。お前は、他の誰でないラウラ・ボーデヴィツヒなのだから…」

そんなこと、深く考えたこともなかった。自分の道は最初から定められたものだと思っていた。

今更そんなもの、ラウラはそう答えたかった。認めたくなかったからだ。だが、言葉が出なかった。それよりも大切な事、心を占めるものがあつたからだ。

「……私に、作り出せるだろうか…？」

ラウラは本心からそう言った。

「お前次第だ。少なくとも、俺は見つけることができた」

そう言うクオヴレー。その顔は先ほどの千冬と同じ顔だった。

「フフフっ、ハハハっ」

自然と笑みが込みがって来た。

嬉しかった。今なら自分を感じる事が出来る。戦うために作られた試験体としてのラウラ・ボーデヴィツヒではなく、自分という個としてのラウラ・ボーデヴィツヒを…。

（教官が先ほど言った通りです。私は私でしかない…。そんな私の私らしさを、これから見つけようと思います）

そんなラウラをクオヴレーは静かに見つめていた。

そのやり取りを扉の前で千冬は聞いていた。

（これは、ラウラの笑い声…）

今までラウラのこんな笑い声は聞いたことなかった。

(こういう風に笑えるんだな…)

それは皮肉ではなく本心からであった。

(ゴードン…)

ありがとう、千冬は心の中でクオヴレーに感謝し、自室に戻って行った。

その後、クオヴレーはラウラの部屋を後にする。一人残ったラウラは仰向けに横になり一人天井を見上げていた。

(クオヴレー…ゴードンか…)

今ならはっきりと自覚できる。自分に足りなかったもの、そしてクオヴレーにあったものを。

(私の可能性…、諦めていた。自分の運命だと決めつけて…)

だが、今は違う。自分が自分であるということ、そんな自分らしさを見つけると決めたのだから。

「…ありがとう」

ラウラはそう呟いた。

そしてラウラの病室を後にし、セシリアと鈴の運ばれた医務室に戻るクオヴレー。

だが、その足は目の前の異様な光景で止まってしまっ

（なんだ…アレは…？）

二人の運ばれた医務室の扉は開かれ、生徒たちの行列ができていた。そして何やら不思議なワードが聞こえてくる。

（私と組んで？ 一体何をだ？）

とところどころから聞こえてくる声、それは全部同じ内容のものだった。

クオヴレーはその行列の傍まで行き、行列を作る女生徒達に言った。

「どうかしたのか？ ここには怪我人がいる筈だが…」

クオヴレーの声にびくっとし、女生徒たちは振り返る。そして女生徒達に囲まれていた一夏とシャルルも叫んだ。

「クオヴレー！」

その声と同時、女生徒たちはクオヴレーを取り囲んできた。

「クオヴレー君！ 私と組んで！」

「いいえ！ 私と組んで下さい！」

それぞれの生徒が一枚の紙を手につかみ、こちらに渡してくる。

クオヴレーはその紙の一枚を受け取り、記されている内容を読んだ。

（今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため二人組での参加を必須とする…。なるほど、『組んで』とはそういう事か…）

だいたいの状況を把握するクオヴレー。それからクオヴレーは言った。

「とりあえず、今急に決めると押しかけられても無理だろう。しばらく考えさせてくれ。ここには怪我人もいるしな。一夏とシャルルもそれでいいだろう？」

クオヴレーの言葉に、女生徒たちはしぶしぶ了承する。クオヴレーであるから尚、その言葉には効力があつた。

そして女生徒たちが医務室から出て行った。

「ふう、助かったよクオヴレー」

シャルルがクオヴレーにそう言う。それに一夏も頷いた。

「でもどうするんだ？ 二人一組って…」

男子同士で組むにしても、三人では一人余る（最もシャルルは女だが）。

それについて一夏が尋ねた時、クオヴレーの中ではすでに答えは出していた。

それを一夏に伝えようとする前に、鈴が一夏の言葉に答えた。

「一夏！ 私と組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが！」

一夏の腕組みそう言う鈴。それに対し、クオヴレーは言った。

「大丈夫なのか？ 体もそうだが、ISの損傷も酷いはずだが」

「そ、それは……」

「ゴードン君の言うとおりです」

鈴の言葉を遮る様に割って入る女性の声。声の方に視線を向けると、そこには医務室の扉を開けて中に入って来る真耶がいた。

「鳳さん、それにオルコットさんのISはダメージレベルがCを超えています。トーナメント参加は許可できません」

「そんな、私十分戦えます！」

真耶の言葉に必死に抗議する鈴。セシリアは苦虫を噛み潰すような表情を浮かべ、ギョツとベッドのシーツを握りしめる。

「ダメと言ったらダメです。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じますよ」

その言葉を聞き、出場するのを諦める鈴。ならば今するべき事はもう一つ、絶対に女子が優勝しないようにする事である。

(実力的にはクオヴレーとデュノアが組めば間違いないんだけど…。一夏が他の…、特に篤と組むのは癪だからね…、って、アレ？ そう言えば篤どこ行ったのかしら？ さつきトイレに行くとか言ってたけど…)

不思議に思うが、今は篤の事よりも自分の事である。鈴は言った。

「一夏、クオヴレー！ あんた達が組んで優勝しないさいよ！ 私たちの分まで！」

「ちょ！ 何でお前が勝手に決めてるんだよ！」

急な鈴の言動に一夏がそう答える。それに合わせ、クオヴレーが一夏に言った。

「その件なんだが、俺はシャルルと組みたい」

「へ？ クオヴレー？」

思わず声を上げるシャルル。それに対して一夏も言った。

「俺は別にいいけど、何か理由があるのか？」

「ルームメイトだから都合が良いと言うだけだ。作戦も練りやすい」

そう答えるクオヴレー。それはウソではないが、クオヴレーがシャルルと組もうとした本当の理由ではなかった。

そんなクオヴレーを見つめるシャルル。表情からは何も感じられないが、直感でクオヴレーが何故自分と組みたいと言ったのかは理解していた。

(ありがとう…、クオヴレー…)

シャルルは心の中でそう思い、優しく微笑んだ。

それに対し、鈴は心の中で舌打ちをする。クオヴレーとシャルルが組む。そうなれば一夏のパートナーとしての最有力候補は箒となるのだ。

「あれ、そう言えば箒は？　一緒に組もうと思ったけど…、まだ戻ってきていないのか？」

鈴の予想通り、一夏は箒の名を言った。

その頃、学園の屋上。そこに一人の少女が一枚の紙を眺めて佇んでいた。風に揺られるポニーテールの黒髪、篠ノ乃箒だ。

(私は…)

その紙に書かれていた内容、それは先ほどクオヴレーが見た紙と同じだった。

「一夏と付き合うという約束をしたのは私だ…。絶対に優勝しなければならぬ」

(そしてたった一つだけ…、これがタッグトーナメントになるならば確実に優勝できる方法がある…。だがそれは…)

そして箒は苦悩な表情を浮かべる。

(余りに理想とかけ離れている)

箒は拳を握りしめ、首を振った。

(それで優勝して、堂々と一夏と付き合えるはずがない！)

だが、一度思い浮かんでしまっただけでは離れない。箒は顔あげて夕日を見つめる。

(私は…)

それから暫くし、箒は夕日に背を向け屋上を後にした。

第十四話 生まれた意味と生きる意味（後編）（後書き）

今回のメインは、篝さんと一夏になると思いますが！予定ですが
お
いっ

にしても、本当に篝さんが空気みたいになってますね…（殴っ！

申し訳ありません>（―――）<

次回もよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892y/>

IS～舞い降りる虚空の使者～

2011年11月22日04時20分発行